

夫の權勢を恐ろしく大切がつてゐるユリヤ夫人まで、まるでこのことが目に入らぬやうな具合だつた。すくなくも、これを重大視しなかつたのである。遂にこの青年は夫人の寵兒となつて、飲み食ひから起き臥しまで、この家でするやうになつた。レムブケーは豫防線を張りはじめた。彼は他人の前でピョートルのことを、『あの青年』と云つた風の呼び方をしたり、如何にも保護者めかしく、肩をぽんと敲いたりしたが、一向きゝめが見えなかつた。ピョートルは相變らず面とむかつて、彼を冷笑するやうな態度をやめなかつた。(その癖さういふ時でも、ちよつと見たところは、いかにも眞面目な話しつ振りだつたけれど。)そして他人のゐる前で、思ひ切り無作法な言辭を弄するのであつた。

ある時レムブケーが外から歸つて見ると、『青年』は留守の間に自分の書齋へ入り込んで、斷はりもなしに長椅子に坐り込んでゐた。彼の言ひ譯によると、ちよいと通りすがりに寄つて見たが留守だつたので、『ついでに一寝入りした』とのことだつた。レムブケーはむつとして、もう一ど夫人に愁訴した。けれど、こちらは夫の怒りつばい性質を一笑に付して、皮肉な調子でかう言つた。どうもあなたは、自分の地位に相當した態度が取れないやうだ。少くも、わたしに向つてはあの小僧つ子も、そんななれ／＼しい態度なんか敢て取らうとしない。『とにかく、あの人は無邪氣で清新なところがあります。社會の常軌にはづれてゐますけどね。』レムブケーは面を膨らしたが、その場は夫人が二人の仲を取りなした。ピョートルは別に詫びを言はうともせず、何か無様な洒落を言つて、誤魔化して了つた。その洒落なども、普通の場合だつたら、また別な侮辱

に取られたかも知れないが、その時は後悔の意と解釋された。

フォン・レムブケーは初つばなから大失策をやつて、飛んでもない弱點を握られて了つた。ほかでもない、例の小説のことを打ち明けたのである。久しい前から、聴き手をほしがつてゐたレムブケーは、ピョートルを詩情に富んだ熱烈な青年のやうに解釋して、近づきになつてからまだ幾日も経たぬうちに、ある夜、自作の一節を、二章ばかり讀んで聞かせた。こちらは退屈なのを隠さうともせずに、無遠慮な欠伸をしながら聞き終つた。そして、一度もお世辭など言はなかつた。たゞちよつと原稿を貸して貰ひたい、暇な時に感想をまとめて見るからと、歸りしなに頼んだ。で、レムブケーは貸してやつた。それ以來、彼は毎日ちよ／＼寄つて行く癖に、原稿は一向返しさうな模様がな。こちらから訊ねても、笑ひで答へるばかりだつた。たうとう終ひになつて、あれはあの日すぐ往來でなくしたと言ひ出した。この事を聞いたユリヤ夫人はまつ赤になつて夫を怒りつけた。

「一體あなたは教會のことも、あの人に話してしまつたんぢやありませんか？」ほとんど懼えたやうに夫人はから叫んだ。

フォン・レムブケーはひどく考へ込むやうになつた。ところが、考へ込むのは彼の體に悪いことなので、醫者から固く禁じられてゐた。それに、縣の行政上いろ／＼面倒が起るばかりでなく(この事は後で話すとしよう)、そこに一種特別の事情が介在してゐた。つまり、單に長官としての自尊心のみに止らず、夫としての感情すら傷つけられたのである。レムブケーは結婚生活に

入るにあたつて、將來家庭内に不和や衝突が起り得ようとは、想像さへしなかつた。自分ではミ
 ナやエルネスチーナを空想しながらも、やはり今までさういふ風な考へを持つて來たのである。
 自分は家庭内の暴風雷雨に堪へられない、と彼は直感してゐた。遂にユリヤ夫人は、明けすけに
 から打ちまけて了つた。

「あなたそんな事で腹を立てる譯に行きませんよ。」と彼女は言つた。「あなたの方があの
 より、二倍も三倍も分別があつて、社會上の地位から言つても、比較にならないほど高い所に立
 つてらつしやる、といふだけの理由から見ましてもね。あのお坊つちちゃんには、以前の自由思想
 のとばつちりが、まだくたくさん残つてゐますが、わたしに言はせれば、なに、ほんの子供じ
 みた悪戯いたづらですよ。なにしろ、急にといふことは出来ませんから、だんく直して行くんですね。
 露西亞のヤンガー・セネレシオン新時代を尊重しなくてはなりませんよ。わたしは愛の力で感化を及ぼして、すは
 といふ瀬戸際で引き止めるつもりでゐますの。」

「しかし、本當にあいつは何を言ひ出すか分かりやしない。」とレムブケーは承知しなかつた。
 「あいつは衆人稠座の中で、しかもわたしを目の前に置いて、政府はことさら國民を暗愚にする
 ために、ブートカなどを飲ませて、それで一揆を防止してる、などと斷言するに至つては、わた
 しもさうく寛大な態度ばかり取つてもゐられないぢやないか。他人の前でこんなことを聞かぬ
 ばならぬ、わたしの役廻りの苦しさも、察して貰ひたいよ。」
 かう言ひながら、フォン・レムブケーは、つい近頃ピョートルと交かはしたある會話を思ひ出した。

一つ自由思想を道具に使つて、相手の毒氣を抜いてやらうと云ふ、罪のない目算から、彼は千八
 百五十九年以來、道樂といふわけではないが、しごく有益な好奇心をもつて、露西亞は愚か、外
 國まで手を伸して丹念に寄せ集めた、ありとあらゆる檄文の祕密な蒐コレクション集を出して見せた。ピョ
 ートルは彼の目的を見抜いたので、無作法な調子でかう言つてのけた。「新しい檄文のたつた一
 行でも、そんじよそこらのお役所にある書類をみんな集めたより、ずつと多くの意義を含んでゐ
 ますよ。おそらくあなたのお役所も、その例に洩れんかも知れませんね。」

レムブケーはびりつとした。
 「しかし、これは露西亞ぢや早過ぎる、あまり早過ぎる。」と彼は檄文をさしながら、ほとん
 ど哀願するやうな調子でかう言つた。

「いや、早過ぎはしません。現にあなただつて、その通り恐れてゐらつしやるではありません
 か。して見ると、別に早過ぎはしないです。」

「しかし、例へば、こゝにある教會破壊の煽動などは……」
 「なぜそれがいけないんです？ あなただつて總明なお方ですから勿論、信仰なぞ持つてはあ
 らつしやらないでせう。信仰が必要なのは、單に人民を暗愚化するために過ぎないくらの事は、
 自分でよくご承知の筈です。實際、眞理は虚偽より美しいですからなあ。」

「その通り、その通り、わたしはせんく君に同意だが、しかしそれは露西亞ぢや尙早だよ、
 尙早に過ぎるよ……」とレムブケーは顔を顰めた。

「へえ、あなたは本當に教會を打壊した上、棒ちぎりをもつて彼得堡へ押し寄せるのに同意する、たゞ問題は時期の點に過ぎないなどと言ひながら、よくまあ政府の公吏で濟してゐられますねえ！」

レムブケーはかうまで無遠慮に尻尾を掴まへられて、もうすつかり逆上^{のぼ}せて了つた。

「それは違ふ、それは違ふ、」次第に強く自尊心をいら立たせながら、彼は夢中になつて言つた。「君は年も若いし、また我々の目的もよく了知してゐないので、さういふ誤謬に陥るんだよ。ねえ、ピョートル君、君は我々を政府の公吏と呼んだね？ いかにもさうだ。それは獨立不羈の公吏だらうか？ いかにもさうだ。しかし、我々がどんな風に活動してゐるか、一たい君はご承知かね？ 君らには責任がある。が、結果に於いては、われ／＼もやはり君達と同じやうに、共同の事業に奉仕してゐるんだよ。たゞ我々は君たちが撒き散らしてゐるもの——我々がゐなかつたら、四方八方にけし飛んで了ふ虞れのあるものを、抑制してゐるのだ。我々だつて君たちの敵ではない、決してさうぢやない。我々は敢て君たちにさう言ふよ——進み給へ、進歩し給へ、撒き散らし給へ——と言つて、つまり當然改造さるべき古いものの事だがね……しかし、一旦その要を認められた場合には、必要な範圍内に於いて君達を制止し、それによつて、君達を自分自身から救つてあげねばならん。なぜと言つて、君達ばかりで我々と云ふものがなかつたら、露西亞の國をがたがたにして了つて、然るべき體面をなくして了ふに相違ない。この然るべき體面といふことを心配するのが、即ちわれ／＼の役目なのだ。いゝかね、我々と君達とは、お互に必要な缺くべからざ

るものだ。それを腹に入れてくれ給へ。英國でも進歩黨と保守黨とは、お互に必要なもんだからね。さうぢやないか、我々が保守黨で、君たちが進歩黨なのさ。まあ、こんな風にわたしは解釋してゐるんだ。」

フォン・レムブケーはもう熱くなつて了つた。彼は彼得堡時代から氣の利いた、自由思想めいた議論をするのが好きだつたが、今は傍で聴くものがないので、なほ調子に乗つて了つた。ピョートルは無言のまま、何だかいつもに似合はず眞面目な態度を持してゐた。これが一さう辯士を煽つたのである。

「ねえ君、わたしはこの『縣の主人』だ。」と書齋を歩き廻りながら、彼は語を次いだ。「ねえ君、わたしはあまり任務が多いために、ほとんど何一つ實行が出来ないでゐる。ところが、一方から見ると、わたしはこゝにゐてもなにか一つする事がない、これもまた正確な事實なのだ。といふと、不思議なやうだが、その實は政府の態度一つでどうともなるのさ。假りに政府が一種の政策のためとか、または熱烈な要求を鎮撫するために、共和國か何か、まあそんなものを建てながら、同時に一方では知事の權力を増したとする。さうすれば、我々は縣知事の席に着いたまゝ、共和國をまる呑みにするよ。なあに、共和國が一體どうしたと云ふのだ？ 我々は何なりとお好み次第のものを、鵜呑みにしてご覧に入れるよ。少くともわたしは……それだけの用意があるやうに思ふ。要するに、もし政府がわたしに電報で *Activité dévorante* (獸身的活動) を命令して來るとすれば、わたしは *Activité dévorante* を開始するよ。わたしはこんど諸君の眼前で、直截にか

う言つた。「諸君、すべて縣政機關の均衡と隆替に必要なものは、たつた一つしかありません、曰く縣知事の權力を擴張することでありませぬ。」え君、地方團體にしる、裁判機關にしる、すべてのかういふ行政司法聽は、いはゆる二重生活の方法を取らなくちやならん。つまりこれ等の機關は存立すべきものでもあるが（全くそれは必要だ）、また一方から觀察すると、彼等の絶滅が必要でもある。何ごとも政府の態度一つさ。一旦これら諸機關の必要を感じしめるやうな風潮が起れば、わたしはそれをちやんと目の前に揃へてご覽に入れる。ところがその必要が去つて了へば、わたしの支配下をどんなに搜したつて、そんなものは決して見つかりこなしさ。まあ、かういふ風に、*Activité dévorante* を解釋してるのだ。ところがこの活動は、縣知事の權力擴張をほかにしては、決して求めることが出来ないのだ。わたし達はかうして、二人きりさし向ひで話してるんだよ。わたしはね、君、縣知事官舎の門前に、特別歩哨を一人おく必要があるといふことを、もう彼得堡へ請求してやつて、いま返事を待つてるところなんだ。」

「あなたには二人くらゐ要りませうよ。」とピョートルが言つた。

「なぜ二人だね？」フォン・レムブケーは彼の前に立止まつた。

「あなたを尊敬せしむるには、たぶん一人ぢや不足でせう。どうしても二人ゐなくちやなりません。」

レムブケーは顔をひん曲げた。

「ピョートル君、君は臆面もなしに、よく口から出まかせが言へるね。わたしが優しくするの

につけ上がつて、いろんな當てこすりを言ふぢやないか。まるで *bourru bienfaisant* (氣むづかし
屋の慈善家) の役廻りを演じてるのだ。」

「まあ、何とでもお考へなさい。」とピョートルは言葉を濁した。「が、とにかく、あなたは僕らのため道をひらいて、僕等の成功の下地を作つて下さるのですよ。」

「僕らのためとは一たい誰のためだね、そして、また成功とはなんの事だね。」レムブケーはびつくりして相手を見据ゑた。けれど、返事は聞かれなかつた。

ユリヤ夫人はこの話しの顛末を聞いて、恐ろしく不満さうだつた。

「しかし、そんなことを言つたつて、」とフォン・レムブケーは辯解した。「あれはお前のお氣に入りだからね、上官の權力を笠にきて、頭ごなしにやつつける譯に行かないぢやないか。殊にさし向ひの時にね……わたしだつて、ついうつかり口を辻らすこともあるさ……人がいゝもんだから。」

「あまり人が好すぎるもんですからね。あなたが檄文の蒐コレクション集を持つてゐらつしやることなんか、わたしは少しも知りませんでしたわ。願ひだから、見せて頂戴な。」

「だが……だが、あの男がたつた一日と言つて、無理に持つて歸つて了つたんだよ。」

「まあ、あなたはまたお貸しになつたんですの！」とユリヤ夫人は怒つて了つた。「何と云ふ拙いやり方なんでせう！」

「すぐ取りにやるさ。」

「寄越しやしませんよ。」
 「わたしは是が非でも要求する！」レムブケーはかつとなつて、席を跳び上がった。「そんなにあいつを恐れねばならないなんて、一體あいつは何者だ？　またこつちから何一つ仕でかす事が出来ないなんて、一たい俺は何者だ？」

「まあ、坐つて氣をお鎮めなさいな。」とユリヤ夫人は押し止めた。「あなたの第一の問ひに對して、わたしかうお答へしますわ。あの人に就いては、わたし立派に紹介を受けてゐますの。なかなか才氣のある人で、どうかすると、たいへん氣の利いたことを言ひますよ。カルマジノフもわたしに斷言しました——あの人はいたる所に關係を結んでゐて、都の青年社會では、大した勢力をもつてゐるんですとさ。もしわたしがあの人を通じて、すべての青年社會をひきつけたうへ、自分の周圍に一つの群グループを作つたら、その人達の功名心に新しい道を示して、滅亡の淵から救つてやりますわ。あの人には心からわたしに心服して、何でもわたしの言ふ事を聞いてくれます。」

「しかしさう／＼甘やかしてゐると、あいつ等どんな事を仕でかすか分かりやしないよ！　無論それは立派な……考へだが……」とレムブケーは曖昧な調子で辯解するのであつた。「しかし……しかしわたしの聞いたところでは——郡に何か檄文が現はれたとかいふことだよ。」

「だつて、それは夏頃の噂だつたぢやありませんか——やれ檄文、やれ贋造紙幣つて、いろんなことを言ひ觸らすんですわ。ところが、今まで一つとして手に入らないぢやありませんか。誰があなたにそんな事を言ひましたの！」

「わたしはフォン・ブリューメルから聞いたのだ。」

「あゝあんな人は眞平ご免ですよ、あんな人のことを言つたら、わたし承知しませんから！」
 ユリヤ夫人はかつとなつて、しばらく物が言へないほどだつた。フォン・ブリューメルは知事官房の吏員だつたが、夫人はこの男を特別にくんでゐた。この事は後で話さう。

「どうかエルホーゼンスキイのことは心配しないで下さい。」と彼女は話しの括りをつけた。「もしあの人何かそんな悪戯いたづらに關係してゐたら、今あなたを始めとして、ほかの誰かれに話してやるやうな具合に、いろんなお喋りが出来るものぢやありませんわ。多辯家は決して恐ろしいものぢやありません。それどころか、わたしはかへつてから斷言して置きます——もし何かそんな風なことが起つたら、わたし一番にあの人の口から聞き出しますわ。あの方は夢中になつて——本當に夢中になつて、わたしに心服してゐるんですの。」

事件の描寫に移るに先立つて、わたしはちよつとこゝで斷はつて置く。もしユリヤ夫人の自負心と虚榮心が、あれほど烈しくなかつたら、あの悪人ばらがこの町で仕でかしたやうな事は、恐らく起らなかつたに相違ないのだ。

第五章 祭の前

ユリヤ夫人が縣内の保母たちのために、豫約申込みの方法で計畫した祭の日取りは、幾度も變更され延期された。いつもお決まりで、夫人の周圍をちよ／＼してゐたのはピョートルのほか、走り使ひの役を仰せつかつてゐる小役人のリヤムシン（これは一時ステュパン氏の所へ出入りしてゐたが、急に例のピアノのお蔭で、知事邸内のお氣に入りとなつたのである）、リプーチン（これは近く發行される、縣内の獨立した新聞の編輯係りに當てようといふ、ユリヤ夫人の目論見だつた）、幾たりかの夫人令嬢、それからカルマジノフ——などといふ顔觸れだつた。この文豪はべつにちよ／＼もしなかつたけれど、文學四班舞踏曲で皆をあつと言はせるのが愉快だと、公然とさも得意らしく吹聴してゐた。申込者や寄付者の數は大したものだつた。町でも一流の鏘々たる場所は、悉くこれに加はつた。しかし、金さへ持つて來れば、あまり鏘々たらざる連中も入場を許された。ユリヤ夫人の説に依ると、各階級の混合は、時として許さるべき事だつた。『でなかつたら、誰もあゝ云ふ人たちを教育する者がなくなるぢやありませんか。』

非公式な内輪の委員會も設けられた。その會議の結果、祭の催しは民主的ならざるべからず、といふことに一致した。夥しい申込みの數は、自然いろ／＼な出費の原因となつて、一同は何か素晴らしいものを作りあげたいと考へ出した。かういふ譯で、たび／＼延期されたのである。また

會場をどこにしようか——この一日のために宏大な邸を提供しようといふ、貴族團長の好意を無にしまいか、それとも、スクワレーシニキイなるブルワラ夫人の所にしようか、この問題もまだ決まつてゐなかつた。スクワレーシニキイは少し遠すぎるが、委員の多數はあそこの方が『遠慮が少いだらう』と主張した。當のブルワラ夫人は、自分の家に決めて貰ひたくつて堪らないのだ。なぜあの誇りの強い婦人が、あんなにユリヤ夫人の鼻息をうかがふのか、ほとんど合點が行かなかつたけれど、たぶん知事夫人の方からも、ニコライに腰をひくくして、ほかの人にはちよつと見せないくらゐの愛嬌を振り撒くのが、ブルワラ夫人の氣に入つたからだらう。もう一度繰り返して言ふが、ピョートルはこのあひだ始終知事の邸内へ、目立たぬやうに一種の觀念を植ゑつけてゐた。つまり、ニコライはあるきはめて祕密な社會に、極めて祕密な關係をもつてゐて、この町へも何か使命を帯びて來たに相違ない、とかういふのであつた。

當時この町の氣分は何だか妙になつてゐた。殊に婦人社會では、一種輕佻な氣分が顯著になつた。しかも、次第にさうなつたとは言ひ憎い。思ひ切つて放縱ないろ／＼の思想が、まるでとつぜん風にも持つて來られたやうな具合だつた。何かしら馬鹿げて陽氣な、輕々しい氣分が町を襲つた。が、それはいつでも氣持のよいものとは申し兼ねる。一種人心の感亂とも言ふべきものが、流行し始めたのだ。あとで何もかも片がついて了つたとき、人々はユリヤ夫人に罪を歸し、夫人の周圍とその感化を責めた。けれど、何もユリヤ夫人一人から起つたとは、ちと受け取り兼ねる。それどころか、多くの者ははじめのうち先を争つて、新知事夫人の社會を結合する腕を讚

美して、急に町が陽氣になつたと言つて、嬉しがつたものだ。中には、二三鬻盛すべき出来事も起つたけれど(それもユリヤ夫人の全然あづかり知らぬところだ)、それでも當時、人々はたゞげらげら笑つて、いゝ慰みのやうに心得てゐた。それを防止しようといふものなぞは、一人もなかつた。尤も、かなり多数の人々は當時の風潮に對して、自家獨特の見解を持ち、傍觀的態度を取つてゐた。けれど、この連中もべつだん不平を訴へるでもなく、かへつてにやゝ笑つてゐたものだ。

今でも覚えてゐるが、當時かなり大きな一つの群グループが自然と形づくられた。その中心はやはりどうも、ユリヤ夫人の客間にあつたらしい。夫人の周圍に集まるこの水入らずの群グループのなかでは(無論、若い人達に限られてゐたが)、様々な悪戯をすることが許されてゐた——といふよりも、まるで憲法のやうになつてゐた。そして、なかには事實かなりだらしない悪戯もあつた。群グループのうちにはなか／＼綺麗な婦人がゐた。かういふ若い人達は、野遊びを試みたり、夜會を催したり、どうかするとまるで騎馬行列ガムカウのやうに、騎馬や馬車で町ぢう練り廻すことがあつた。彼らは變つた出来事を搜して歩くばかりか、たゞ／＼愉快な話しの種を得たいばかりに、わざと自分たちで作り出したり、組立てたりするのだつた。彼等はわたし達の町を、まるで愚人ドール(傳説中)か何ぞのやうに扱つてゐた。人々は彼らを口悪だの、皮肉屋だのと呼んでゐた。それは、彼らが何でも平氣でやつてのけたからである。

早い話が、こんな事もあつた。土地のさる陸軍中尉の妻君で、夫の俸給が少いために、瘠せこ

けてはゐるけれど、まだごく若い黒髪女ブリュネットが、ある夜會でちよつとした輕はづみな心持から、賭の大きい歌留多の勝負に加はつた。それはどうかして、婦人外套マントを買ふの金が勝ちたいと、たゞそれだけの慾だつたのである。ところが、勝つどころか、十五留も負けて了つた。彼女は夫が恐ろしい上に、第一、拂はうにも金がなかつたので、昔の勇氣を奮ひ起して、早速その夜會の席で、この町の市長の息子に、こつそりと借りることに決心した。市長の息子は、年に似合はぬ摺れつからしの、仕様のない不良少年だつたので、その頼みを撥ねつけたばかりで足りないで、おまけにげら／＼と大聲で笑ひながら、夫の所へ告げ口に行つた。實際、俸給だけで世智からい暮らしをしてゐた夫の中尉は、妻君を家へ連れて歸ると、泣いたり喚いたり、膝を突いて詫びたりするのに耳もかさず、腹さん／＼油を絞つた。この苦々しい顛末は町中いたる處で、たゞ一場の笑ひぐさにされて了つた。しかも、この不幸な中尉夫人は、ユリヤ夫人を取巻く群グループに入つてゐた譯でなく、たゞこの騎馬隊カウカウに屬する一人の夫人——突飛で元氣な性質ナチュの女——が、何かでこの中尉夫人を知つてゐたので、彼女の家へ出かけて行つて、自分の所へお客に來いと、てもなくひつ張り出したのである。

このとき隙さずわが悪戯小僧の面々は、中尉夫人を連れ出して、優しい言葉を浴せたり、いろいろ贈り物の雨を降らせたりして、四日ばかり夫の手へ返さずに引留めた。彼女は元氣のいい夫人の家に暮らして、毎日のやうにその夫人を始めとして、大はしやぎの連中と一緒に町ぢう散歩に練り歩いたり、いろんな陽氣な催しや舞踏などに加はつた。一同はこの間じう彼女を羨しか

けて、夫を法廷へ引出して、一騒動もち上げるように勧めた。そして、みんな彼女の味方をして證人になつてやると誓ふのだつた。夫は敢て争ひを挑まうともせず、口を緘して黙つてゐた。たうとう哀れな中尉夫人は、飛んでもない災難に落ち込んだのを悟つて、恐ろしさに生きた心地もなく、四日目の晩たそがれに乗じて、保護者たちの手から、夫のもとへ逃げ歸つた。夫婦の間にどういふ事が起つたか、くはしいことは分らないけれど、中尉の借りて住んでゐた低い木造の小家の窓は二つとも、二週間ばかり鎧戸を閉めたきり開かなかつた。

ユリヤ夫人はこの出来事をすつかり聞いた時、いたづら小僧たちの仕打ちにひどく腹を立てた。元氣のいゝ夫人が、中尉の妻君を偷み出した初めての日、ユリヤ夫人に引合せたとき、彼女はそのやり口にだいぶ不満らしかつたけれど、この事はすぐに忘れられてしまつた。

またその次には、他郡からやつて来た青年で、低いところに勤めてゐる官吏が、これまた詰らない小役人ではあるけれど、見たところ、なか／＼品のいゝ一家の主人と云つたやうな人から、十七になる娘を貰ひ受けて結婚した。それは町でも誰知らぬ者のない美人だつた。ところが突然こんな事が人々の耳に入つた。ほかでもない、結婚の第一夜に新郎はその美人に對して、自分の名譽を傷つけられた復讐だとか言つて、穩かならぬ振舞ひをしたとのことである。祝ひ酒に酔ひつぶれてその家に泊つたため、ほとんど全部その出来事を目撃者となつたリヤムシンは、さつそく夜が明けるか明けなにかに、この愉快な報知を携へて、みなのところを駆廻つた。たちまちにして、十人ばかりの一隊が組織されて、一人の除外例もなく騎馬で出かけた。ある者、例へば

ピョートルとかリプーチンなどの如きは、借りものの哥薩克馬に跨つた。リプーチンは白髪の見え初める年をしながら、町の輕はづみな青年の企てる苦々しい馬鹿騒ぎを、ほとんど一つとして、はづした事がなかつた。

町の習慣で、結婚の翌日はどんな事があらうとも、ぜひ知人訪問をしなければならぬので、若夫婦が二頭立ての馬車に乗つて、往來に現はれた時、この騎馬隊カウカウはいきなり陽氣な笑ひ聲を上げて、若夫婦の馬車を取圍んだ。そして、朝の間ぢう町をぞろ／＼ついて歩いた。尤も、家の中までは入らなかつたけれど、馬に乗つて門の傍で待つてゐた。新郎新婦に對して、格別どうといふほどの侮辱を加へることは慎んだけれど、とにかく見苦しい光景を呈したのは確かである。町ぢうがこの噂をした。言ふまでもなく、みんなげら／＼と笑つたのである。しかしこの時、フォン・レムブケーが恐ろしく腹を立てて、ユリヤ夫人と一場の活劇を演じた。夫人も一通りならざ立腹して、以後この悪戯小僧どもの出入を断らうと考へた。が、翌日ピョートルの辯解と、カルマジノフの數言によつて、遂に一同を赦すことにした。カルマジノフがかなり機智に富んだ『洒落』を言つてのけたのである。

「あれはこゝの氣風なんですよ、」と彼は言つた。「少くも奇警ですよ、そして……痛快です。ご覽なさい、みんな笑つてるぢやありませんか、ぶつ／＼言つてるのは、あなた一人だけですよ。」

しかし、續いてかの忌はしい性質を帯びた、もうとうてい我慢の出来ない悪ふざけが起つた。

わたし達の町に福音書を賣り歩く行商の女が現はれた。それは町人の生れたつたが、立派な尊敬すべき婦人であつた。そのころ首都の新聞でも、かうした行商の女に就いて、面白い批評が現はれ始めたばかりだつたので、それはすぐ人々の話題に上つた。ところが、今度もまたやくざ者のリヤームシンが、小學教師の口を求めてのらくらしてゐる神學生と共力で、この婦人の本を買ふやうな振りをして、外國製の猥雑な寫眞を一たば、そつと袋の中へ忍ばせたのである。後で聞けばこの寫眞は、首に立派な勳章の一つも掛けてゐようと言ふ、さる身分ある老人が（名前は言はずに置く）、この計畫のためにわざ／＼寄付したとのことである。老人は彼自身の言ひ草によると、『健全なる笑ひと愉快な冗談』が好きなのだつた。で、哀れな婦人が町の勸工場で聖書を出さうとしたとき、例の寫眞がばら／＼と落ち散つた。群衆の哄笑、つゞいて憤慨の聲が起つた。一同はひし／＼と詰めかけて罵り始めた。もし折よく警官が馳け着けなかつたら、毆打さはぎにもなり兼ねないところだつた。聖書賣りの女は留置場に押し籠められた。やつと夕方になつて、この忌はしい事件の内幕を、くはしく聞き知つたマヴリーキイが、非常に憤慨して、いろ／＼盡刀した結果、やつと釋放されて、市外へ送り出された。

今度こそはユリヤ夫人も、斷然リヤームシンを放逐しようとしたが、その晩、連中が一同うち揃つて、彼を夫人の所へつれて來た。そして、彼が一種特別なピアノの曲弾きを工夫したことを報告して、ちよつと聞くだけ聞いてくれと懇願した。それは『普佛戰爭』といふ曲目で、全く愛嬌のあるものだつた。曲は嚴めしいマルセリエーズの響きで始まつた。

Qu' un sang impur abreuve nos sillons ! 敵の羶血わが野を浸せ

華々しい挑むやうな音律、未來の勝利に酣酔したやうな諧調が響き出した。しかし思ひがけなく、巧みにつくり變へられた國歌の拍子タクトと同時に、どこか隅つこの脇の方で、Mein Lieber Anjustin (わしの愛しいアウグスチン——獨逸の俗歌)の野卑な響が聞えて來た。それは深い底の方から響いてゐたけれど、また恐ろしく近い處に聞こえるのだつた。けれど、マルセリエーズはそれに氣がつかないで、自分の雄壯な調子に酔ひきつたもののやうだつた。しかし、アウグスチンはそれに屈しないで、いよいよ粗暴な調子を發揮して行つた。と、不意にアウグスチンの拍子タクトは、どうしたものか、マルセリエーズの拍子タクトと一緒に始めた。こちらは腹を立て始めたやうな風である。今になつて、やつとアウグスチンの存在に氣がついたので、ちやうど取るに足らぬうるさい蠅でも拂ひのけるやうに、一生懸命ふり落さうと試みたが、『わしの愛しいアウグスチン』はしつかり獅噛みついて了つた。彼女はうき／＼として、大得意で、さも嬉しさに、しかも暴慢だつた。マルセリエーズはどうしたものか、急に恐ろしく間が抜けて來た。もう痼癢を起してぶり／＼してゐることを、隠さうともしなくなつた。それは憤懣の悲鳴だつた。神に兩手をさし伸べて、一生懸命に押し揉みながら發する、呪ひの言葉であり涙であつた。

Pas un pouce de notre terrain, — われらの土地の一寸も——

Pas une pierre de nos forteresses. — われらの城の一石も——

しかし、もう彼は『わしの愛しいアウグスチン』と、拍子を揃へて歌はねばならなくなつた。

その音はどうした事か、ばかしくもアウグスチンの調に移つて行つて、次第に力を弱めつゝ、消ゆるになん／＼としてゐる。たゞ時々、突發的に *qu' un sang impur* (穢血) といふ響が聞えるが、すぐに忌はしいワルツに飛び移るのだつた。彼はもうすつかり諦めて了つた。それは丁度ビスマルクの胸に抱かれて慟哭しながら、なにもかも抛げ出してしまつたジュール・ファーヴル(ビスマルクと誰語條約を終んだ佛の外相)のやうだつた。かうなると、アウグスチンはますます／＼猛威を揮つた。しは嘔れた聲が聞え、滅茶々に麥酒を呻りつけたやうな物狂ほしい自己喝采や、幾十億の償金、細巻の葉卷、三鞭酒、人質——かういふものゝ要求が、音響の中に感じられた。やがて、アウグスチンは猛烈な叫喚に移つて行く……かうして普佛戦争は終りを告げた。

仲間の連中は喝采した。ユリヤ夫人はほ／＼笑みながら、『まあ、どうしたらこの人を追ひ出せるでせう。』と言つた。これで講和は締結された。この卑劣漢は實際ちよつとした才能を持つてゐた。ステパン氏は一度わたし達に向つて、最も藝術的な天才でも、同時に最も戦慄すべき卑劣漢であり得る、この二つは決して互に反撥するものでないと、口を極めて主張したことがある。その後、人の尊によると、この曲は、リヤムシンがある一人の極めて謙抑な、才能ある青年の作を、剽竊したとのことである。それは彼の知人で、通りすがりに暫くこの町で逗留したのだが、そのまゝ人に知られないで終つて了つた。それはさて置き、今まで幾年かの間ステパン氏の家の集りで、お望み次第にいろんな猶太人の眞似をしたり、壘のお婆さんの懺悔や、赤ん坊の生れるところなどを寫して見せたりして、いろ／＼ご機嫌を伺つてゐたこのやくざ者が、今は時々

リヤ夫人の所で、當のステパン氏を掴まへて、『四十年代の自由思想家』といふ名稱のもとに、悪どい戯畫カリカチュアにして見せるのであつた。一同はその度に笑ひ轉げた。かういふ譯で、了ひには全然おつ拂ふといふことが出来なくなつた。そんな事をするには、あまり必要な人物となつたのである。その上に、彼はいやらしいくらゐピョートルのご機嫌を取つた。ピョートルはまたピョートルで、最近に至つて不思議なくらゐ、ユリヤ夫人に一方ならぬ勢力を振ふやうになつた。わたしは決してこんな卑劣漢のことを、取立ててかれこれ言ふつもりではなかつた。こんな男のために時間をつぶす値うちはない。ところがこの時、一つのいま／＼しい事件が起つた、人の話に依ると、彼もそれにかゝりあつてゐたこの事である。さうして、またこの出来事はわたしの記録から、どうしても逸する事が出来ないのである。

ある朝いま／＼しく醜い、冒瀆な出来事に關する噂が、町ぢうに擴つた。町の大きな廣場の入口に、この古い町でも殊に珍しい古蹟とされてゐる、聖母誕生寺といふ古びた教會があつた。この教會の扉の門際に、聖母マリヤの大きな聖像が金網を被せて、扉の中へ箒め込んであつた。ところで、この聖像が一夜の中に盗難に遭つたのだ。厨子の硝子は叩き毀され、金網は引き破られて、冠や袈裟に附けてあつた寶石や眞珠が、非常に高價なものかどうか知らないが、とにかく幾つか抜取られたのである。しかし一番ひどいのは、單に盗みをしたばかりでなく、おまけに人を馬鹿にしたやうな、譯の分からぬ瀆神な振舞をした點だつた。ほかでもない、厨子の毀れた硝子の中に、生きた二十日鼠が入つてゐるのを、朝になつて發見したのだ。四箇月を經過した今日で

は、この犯罪を行つたのは懲役人のフェーデカだ、といふことが確められて来たけれど、それと同時にどういふ譯か、リヤームシンもこれにかゝりあひがあると、つけたりに言ひ出すやうになつた。當時は誰一人、リヤームシンのことなぞ口にする者もなかつたのに、今ではみんなが口を揃へて、あのとき二十鼠を入れたのはリヤームシンに相違ない、と斷言してゐる。

今でも覚えてゐるが、當時官憲も大分ショックを受けた風である。群集は朝から犯罪の現場に押しかけた。どんな種類の人か知らないけれど、いつでも百人くらゐの群集が集つてゐた。一人去ればまた一人、といふ風なのである。近寄つて来る人々は、十字を切つて、聖像に接吻するのだつた。やがて喜捨する人もぼつ／＼出来たので、教會では賽錢受けの皿を出して、その傍に坊主を一人立たした。やつと三時近くなつて、警察の方でも、町民が一つ所に立つて、押し合ひへし合ひしないやうに、お祈りをして接吻して喜捨を濟したら、さつさと通り過ぎるやうに、命令することも出来るわけだと氣ついた。この不幸な出来事は、フォン・レムブケーに極めて暗い印象を與へた。わたしが人からまた聞きしたところによると、ユリヤ夫人は後でこんなことを言つたさうである。彼女はこの不吉な變の起つた朝以來、妙に意氣鎖沈した心持が、夫の顔に現はれ始めたのに、氣づいたとのことである。この表情はつい二月まへ、病氣の故をもつて町を去るまで、ずつと引續いて彼の顔を離れなかつた。いま彼はこの縣に於ける短い行政官生活の後、瑞西で休養を續けてゐるのだが、たぶん、でもやつぱり付き纏つてゐることだらう。

今でも覚えてゐるが、わたしも午の十二時すぎ、その廣場へ行つて見た。群集は多く無言がち

で、人々の顔は何となくとげ／＼しく、氣難しさうだつた。脂ぎつて黄色い顔をした一人の商人が、田舎風の馬車に乗つて近づいたが、傍まで来ると乗り物から下りて、額が地に着くほど恭々しく禮拜すると、聖像に接吻してルーブリの喜捨をした。そして、嘆息しながら、馬車に乗つて、再び向うへ行つて了つた。また一臺の幌馬車がやつて来た。それには、二人の悪戯小僧に伴はれた、町の貴婦人が二人乗つてゐた。青年たちは（と云つても、一人の方はもう青年と言へなかつた）、同様に馬車から下りて、かなり無遠慮に群集を掻き分けながら、聖像の方へ押しかけた。二人とも帽子を脱らなかつたばかりか、一人の方はわざ／＼鼻眼鏡を掛けた。群集の中でぶつぶついふ聲が聞えた。尤も、低い調子ではあつたが、だいぶ反感を抱いてゐるらしかつた。鼻眼鏡の青年は、紙幣のぎつちり詰つた金入れから、一カペイカの銅錢を取り出して、ぼんと皿の上へ抛り出した。二人は聲高に笑つたり、話したりしながら、馬車の方へ取つて返した。丁度この時、リザゼータがマヴリーキイと同道で駆けつけた。彼女は馬から飛び下りると、マヴリーキイには馬上のまま、そこへちつとしてゐるやうに云ひつけて、手綱をその手に投げつけるなり、聖像の傍へ近寄つた。それは銅錢の抛り出された瞬間だつた。憤怒の紅が彼女の頬にさつと漲つた。彼女は圓い帽子と手袋を脱ぐや否や、いきなり聖像に向つて汚い歩道に跪つき、恭々しく三度まで額を土につけた。それから、自分の金入を取出したが、その中には十哥の銀貨が二三枚しかなかつたので、早速ダイヤの耳環をはづして、皿の上に載せた。

「構ひませんか、構ひませんか？ お袈裟の飾りにね？」全身をわく／＼させながら、彼女は

僧にから聞いた。

「宜しうございます、」とこちらは答へた。「喜捨はすべて功德になりますで。」

群衆は非難の聲も立てねば、賞讃の意も表はさないで、無言のまゝ控へてゐた。リーザは汚れた着物のまゝ馬に跨つて、まつしぐらに駆け去つて了つた。

二

いま話した事件から二日たつたのち、騎馬の人々に取巻かれた三臺の幌馬車に分乗して、どこかへ出かけて行く大人数の團體の中に、リザエータを見つけたのである。彼女は手でわたしを差し招いて、馬車を止め、わたしもこの團體に加はるやうに、一生懸命に頼み始めた。馬車の中にはわたしに坐るだけの場所があつた。彼女は、けばくしい作りをした同乗の婦人たちに、笑ひ笑ひわたしを紹介した後で、これから素敵に面白い遠征に出かけるところだと説明した。彼女はからく〜と高聲に笑つて、何か度はづれに幸福らしく見受けられた。ちかごろ彼女は何か運葉なくらゐりき〜して來た。

實際この遠征は突然なものだつた。一同は川向うの商人セラスチヤーノフの家へ、押し掛かけて行くところである。その家の離れにはもう十年近く、セメヨーン・ヤコヴレギッチと云つて、單にこの町ばかりでなく、近縣は愚か兩首都まで知渡つてゐる豫言者の聖者が、穩かに何不自由なく、ちんまりと、その日その日を送つてゐた。人々——取り分け、よそから來た旅人は彼の奇

矯な一言を得るために、わざ〜訪ねて來て、拜んだり、喜捨をしたりするのであつた。喜捨の金は時とすると、かなり莫大な高にのぼる事があつたが、その場でセメヨーン聖者が使ひみちを指定しないかぎり、恭しく神のみ寺へ送られる事になつてゐた。寺は町の聖母誕生寺が主だつた。で、寺からはこの目的のために僧が一人來て、絶えずセメヨーン聖者の張り番をしてゐた。一行は圖抜けて愉快な出來事を豫期してゐた。一行中には、まだ一人もセメヨーン聖者を見た者がなかつた。たゞリヤムシンだけは、いつか一ど行つた事があるとかで、いま一生懸命にその話をするのだつた。何でも聖者は、彼を箒で叩き出せと言ひつけたらうへ、大きな馬鈴薯の煮たのを二つ、自分の手で後から投げつけたとのことである。騎馬の連中のうちには、またしても借り物の哥薩克馬に乗つたピョートルと（彼は恐ろしく落着き悪さうに跨がつてゐた）、同じく騎馬のニコライが見受けられた。彼はどうかすると、かうして一同うち揃つての騒ぎに加はることがあつた。さういふ場合には、いつでも人の感情を傷つけないやうな、愉快さうな顔を作つてゐたが、それでも依然として、あまり口數を利かなかつた。

この遠征隊が橋の方へ下りて行つて、町の宿屋の傍まで來たとき、たつた今この宿の一室で、拳銃自殺を遂げた旅人を見つけて、警察の臨検を待つてゐるところだと、突然たれか言ふものがあつた。すぐ様その自殺者を見ようぢやないか、といふ動議が提出せられた。この説はすぐに賛成者を得た。一行の婦人たちは、まだ一度も自殺人を見た事がなかつたので。何でも一人の婦人が、さつそく大きな聲で、『もう何もかもすつかりあき〜して了つたから、氣の紛れる事なら、

少しも遠慮する必要はないわ、面白くさへあればいぢやないの。」と言つたのを覚えてゐる。たゞ幾たりか少数の者が、玄關の前で待つてゐたばかりで、ほかの者は一同そろつてどやどやと、汚い廊下へ雪崩れ込んだ。その中には、驚いた事に、リザゼータの姿も見受けられた。自殺人の部屋は開け放してあつて、無論われ／＼に留め立てなどするものはなかつた。

彼はまだやつと十九になつたばかりで、決してそれより上ではあるまいと思はれるくらゐ、なま若い青年だつた。きつと美しい容貌の持主だつたに相違ないらしく、白つぽい髪の毛は房房と伸び、輪廓の正しい顔は卵なりをして、額は清らかに美しかつた。もう體が硬直して了つて、白い顔は大理石のやうに見えた。卓の上には遺書が載つてゐて、自分の死に就いては誰をも咎めてくれるな、この自殺の原因は四百ルーブリの金を『飲んで了つた』からだ、と書いてあつた。『飲んで了つた』といふ言葉は、ちやんと手紙に載つてゐたのである。そして、四行ばかりの間に文法の誤りが三つまであつた。そこに居合した一人の肥つた地主風の男が、殊に同情して溜息をついてゐた。見たところ、用事があつて同じ宿に泊つてゐる、近所同志の人らしい。この男の言ふところに依ると、少年は家族の者——後家である母親や、姉、叔母たちの命を受けて、町の親戚の婦人のもとへ赴き、そのさし圖を受けて、一ばん上の姉の嫁入り支度に必要な品を色々買ひ調べ、それを家を持つて歸るつもりで、村を出たのであつた。幾十年間の辛抱で貯へられた四百ルーブリの金は、このとき彼に託されたのである。親たちは心配のあまり吐息をつきながら、くどくどと果てしのない教訓や、お祈りや、十字の呪ひで彼を見送つた。彼はこれまでごくおとなしい、

末頼もしい少年だつた。

三日前に當市へ着くと、彼は親戚の婦人の所へ顔を出さないで、この宿につくと、いきなり俱樂部へ出かけた。どこか裏の方の部屋で、旅の銀行(歌留多)師か、それともストック師くらゐあるだらうと、當にしたのである。ところが、その晩は丁度ストック師も、銀行師もゐなかつた。もう夜なか過ぎて宿へ歸ると、三鞭酒(シャンパン)とハバナの葉巻(シガ)を取寄せ、六皿か七皿の晩食を注文した。しかし三鞭酒に酔つ拂つた上、葉巻で胸を悪くしたので、運んで來た喰べ物には手も觸れず、ほとんど前後不覺で床に就いた。その翌朝は、林檎のやうにさば／＼した心持で目を醒ました。そして早速、ゆうべ俱樂部で聞いたシプシイの天幕(テント)をさして、川向うの村へ出かけたまゝ、二日間宿へ歸つて來なかつた。やつと昨日の夕方五時ごろに、ぐでん／＼になつて歸つて來た。そしていきなりぶつ倒れて了つて、晩の十時までぐつすり寝込んだ。目が醒めると、彼はカツレッツにシヤトー・ド・イケームを一壘、そして葡萄一皿を誂へて、紙と墨汁(インク)と勘定書を持つて來さした。誰ひとり彼の様子に、變つた所があるとも氣づかなかつた。彼は落ち着いて、靜かで、もの憂しかつた。自殺したのはまだ十二時前後らしいが、誰も拳銃(ピストル)の音を聞いたものがないのは、不思議だつた。やつと午後の一時期に氣がついて、戸を叩いたが、いくら叩いても返事がないので、戸を毀して中へ入つたのである。

シヤトー・ド・イケームの壘はなかば空しくなり、葡萄もやはり半分ばかり皿に残つてゐた。自殺は三連發の拳銃でやつたもので、丸はまつ直ぐに心臓に打込まれてゐた。血はごくぼつちり

しか出てゐなかつた。拳銃は手から這つて、絨氈の上に落ち、當の少年は片隅の長椅子の上になかば横はつてゐた。ほんの刹那に絆切れて了つたものと見えて、知死期の苦悶の痕は少しも顔に見えなかつた。その表情は穩かで、ほとんど幸福らしく、さながら生けるもののやうであつた。我々の一行は貪るやうな好奇心をもつて、一心に見守つてゐた。一般に、すべて他人の不幸といふものは、どんな場合でも、傍觀者の眼を娛しませるやうな物を含んでゐる——その傍觀者が誰であらうと、例外にはならぬ。婦人連は無言でじろく見廻してゐるし、つれの男たちは元より皮肉の鋭さと、づ抜けて膽玉が据わつたので聞えた連中だつた。なるほど、これは一ばん氣の利いたやり口だ、この少年もこれ以上、賢い分別はつかなかつたらう、と一人が言へば、ほんのちよつとの間ではあるが、生き甲斐のある暮らしをしたものだ、といま一人が結論した。するともう一人の男がだしぬけに、どうして露西亞ではかちやたらに首をくづつたり、ピストル自殺をしたりするものが多くなつたのだらう——まるでみんな根が切れて了つたか、足もとの床がわきへ這り抜けて了つたか何ぞのやうだ！ とやつつけた。人々はこの理窟やの顔を無愛想にちらと見た。その代り、仲間のために道化役を勤めるのを、ほとんど名譽のやうに心得てゐるリヤームシンが、皿の上から葡萄を一房ひつ張り出した。續いて一人二人が、シャトー・ド・イケームの壘に手を伸ばさうとしたが、丁度そこへやつて來た警察署長が押し留めた。しかも、そればかりか、『この部屋を引上げる』やうに頼んだ。もうみんな飽きるほど見て了つたので、すぐ争はうともせずに出て行つた。尤も、リヤームシンは何か言ひながら、署長に付きまゝつてゐた。一行

のうきくした氣分と、笑ひ聲と、奔放な會話とは、その後の半分道を行く間ぢう、ほとんど前に倍して元氣を増した。

ちやうど午後一時、わたし達はセメヨン聖者の處へ着いた。かなり大きな商人の家は開け放しになつてゐて、離れの方の出入りは自由だつた。行くとすぐ、セメヨン聖者はご食事中だけれど、面會なさるといふことが分かつた。わたし達の一行は、一時にどやくと中へ入つた。聖者が食事を取り、來訪者に接する部屋は、三つ窓のついた、かなりゆつくりしたものだつたが、高さが腰までの木格子で横に壁から壁まで、ちやうど眞半分に仕切られてあつた。普通の來訪者は格子の向うに残つてゐるが、特別のあやかり者だけ聖者の指定で、格子に設へた戸を潛つて、奥へ入られることになつてゐた。そのうへ彼は氣さへ向けば、自分の古い革張の肘椅子や、長椅子に坐らすのであつた。聖者自身は必ずブルテル式の、耗れた古い肘椅子に坐るのが決りだつた。

彼は年の頃五十五ばかり、かなり大柄な、ぶよくむくんだやうな、黄色い顔をした男で、禿げた頭には白つぽい薄い髪が生え残り、鬚鬚は剃り落とされてゐた。右の頬が脹れて、口は心もち歪んだやうに見え、左の鼻の孔の傍に大きな疣があつた。眼は小さくて、顔は落着き拂つた、物々しい、そのくせ眠さうな表情をしてゐた。服装は獨逸風の黒いフロックコートだが、胴衣もなければ頸飾もなかつた。フロックの陰からはかなり地は古いけれど、汚れない白い襯衣がのぞいてゐた。見たところ病氣持ちらしい足には、布靴を穿いてゐる。わたしの聞いたところでは、

彼はもと官吏を勤めたこともあつて、官等さへ持つてゐるとの事である。彼はたつたいま軽い魚の汁を喰べ終つて、二つ目の皿——皮つきの馬鈴薯と鹽——に手をつけたところだつた。これ以外の喰べ物は決して口に入れなかつた。たゞその代りお茶は澤山のんだ。これが大の好物なのである。周りには三人の給仕があちこちしてゐた。これは主人の商人が給料を出してゐるので、一人は燕尾服を着込んだ侍僕だし、いま一人は職工組合あたりから来たものらしく、もう一人寺の番僧か何ぞのやうだつた。そのほかに至つて腕白らしい、十六ばかりの小僧つ子がゐた。給仕たちのほかに、少し肥え過ぎてゐるけれど、相當地位のありさうな胡麻鹽の僧が、賽銭受けの壺を捧げて控へてゐた。幾つかある卓の一つには、づ抜けて入きな湯沸が煮立つてゐて、その傍にはほとんど二打もありさうな、杯を載せた盆が置いてある。反対側にある卓には寄進の品々——幾つかの砂糖の大塊や、一斤づゝ袋に入つた砂糖や、二斤ばかりの茶や、繡ひをした上靴や、絹の手巾や、羅紗の切れつ端や、麻の布やそんなものが載せてある。金の喜捨は大抵、僧の持つてゐる壺の中へ入つて行くのだつた。

部屋の中は恐ろしい人混みで、少くも一打くらゐの來訪者があつた。そのうち二人だけは格子の向うへ入つて、セメヨーン聖者の傍に坐つてゐた。それは白髪頭をした『平民出』の年寄つた順禮で、いま一人は小柄な、乾からびた、よそもの僧だつたが、ちんとかしこまつて、伏し目勝ちに控へてゐた。その餘の來訪者は格子のこちら側に立つてゐた。大抵は平民階級の者が多かつたけれど、中に他郡から來た頤髭の長い、純露西亞風のなりをした、丸持ち長者といふ評判の

高い肥えた商人と、年取つた見すばらしい士族出の婦人と、一人の地主が交つてゐた。一同は幸運が廻つて來るのを待つてゐたが、口に出してはいはなかつた。四人ばかりのものは膝を突いてゐたが、その中でも一ばん目に立つのは、年頃四十ばかりの肥満した地主だつた。彼は格子のすぐ傍の一ばん目立つ所に膝をついて、セメヨーン聖者の優しい視線か言葉のかゝるのを、悲しげに待ち構へてゐた。けれど、こちらは少しも彼に目をくれなかつた。

われ／＼一行の婦人は楽しさうな、嘲るやうな聲でひそ／＼囁き交しながら、格子のすぐ傍へ押し寄せた。膝をついてゐた者も、その他すべての來訪者も、悉く押し狭められたり、前に垣をされたりして了つた。たゞ例の地主ばかりは、根氣よく目に立つ場所にも残つたまゝ、兩手で格子を掴まへて居た。貪るやうな好奇心に輝く楽しさうな目は、一齊にセメヨーン聖者の上に注がれた。中には柄つき眼鏡や、鼻眼鏡や、双眼鏡まで光つた。少くも、リヤームシンは双眼鏡で、ためつすがめつしてゐた。セメヨーン聖者は小さな目で一同を、落ち着き拂つて大儀さうにじつと見廻した。

「色目を事とする輩ぢや！ 色目を事とする！」と軽く嘆息するやうに、彼はしやゝ腹れた低音でかう言つた。

一同はみな一齊に笑ひ出した。『いろめつて何の事！』しかし、セメヨーン聖者はまた沈黙に返つて、馬鈴薯を平らげにかゝつた。つひにナプキンで口を拭き了ると、給仕が茶を出した。

彼が茶を飲むのは、大抵一人ではなくて、來訪の者にも注いで飲ませた。けれど、なか／＼一同、

残らず配つてやるやうな事はしなかつた。ふつう自分で中の誰かを指さして、この光榮を與へるのが常だつた。そのさし圖の仕方が思ひ切り突飛なので、いつも人々を驚かした。時には富豪や高官を出し抜いて、苔の生えさうな老婆や百姓にやれと言ひつけることもあれば、また時には貧しい人々を素通りして、何か脂肥りのしたやうな金持に飲ますこともあつた。茶の注ぎ方もやつぱりまち／＼で、砂糖を杯に入れてやつたり、添へて嚙らせたり、まるで砂糖なしで飲ませたりした。今日この光榮を受けた人々は、よそのもの僧——これは杯の中へ砂糖を入れて貰つた——と年寄りの順禮、これは砂糖なしだつた。町の修道院から來てゐる、例の壺を持つた太り肉の僧は、これまで毎日一杯づゝ貰つてゐたにも拘らず、今日はまるで持つて來て貰へなかつた。

「セメヨーン長老さま、わたしに何かお言葉をかけて下さいませんか。わたしはずうつと以前から、あなた様とお近づきになりたいと存じまして。」一行中のはで作りな婦人が、唱ふやうな調子でかう言つた。これは先ほど『氣の紛れるやうな事なら、少しも遠慮する必要はないわ、面白くさへあればいゝぢやないの。』と言つた當人である。

セメヨーン聖者は、その方に目をくれようともしなかつた。例の膝を突いてゐた地主は、まるで大きな鞆を上げてまた下げたやうに、すうつと深い溜息をついた。

「あの人に砂糖を入れたのをな！」丸持ち長者の商人を指さしつゝ、セメヨーン聖者は出し抜けにかう言つた。

丸持ち長者は前へ進み出て、地主と押し並んで立止つた。

「あれにもつと砂糖を入れてやれ！」もう杯に茶を注ぎ終つた時、セメヨーン聖者はかう云ひつけた。また一人前の砂糖が投じられた。『もつと、もつと入れるのだ！』でまた一度、更にまた一ど砂糖が加へられたのである。

商人はさも恭々しげに、舍利別のやうな茶を啜り始めた。

「あゝ、神様！」と囁きながら、群集は十字を切つた。

地主はまたしても深い溜息を音高く洩らした。

「長老様！ セメヨーン上人様！」悲しさうではあるけれど、それこそ思ひがけないほど甲走つた聲が、不意に高く響き渡つた。それはわれ／＼一行に壁へ押し附けられてゐた、見すばらしい老女の聲だつた。「もうまる一時間お情けを待つて居ります。わたくしにお言葉をかけて下さりませ。頼りのない年寄りに智恵を授けて下さりませ。」

「聞いて見い。」とセメヨーン聖者は給仕の番僧に言ひつけた。彼は格子の傍へ近づいた。

「あなたは、この前セメヨーン上人様の仰しやつた事を、ちやんとその通りなさいましたかね？」と彼は低いなだらかな聲で、やもめに問ひかけた。

「おゝ長老様、セメヨーン上人様、何が出来るものでござりまするか、あいつらを相手に何が出来るものでございませう！」とやもめは泣くやうに叫んだ。「あの人呑鬼めら、わたくしを裁判所へ訴へるの、元老院へ突出すのと言つて、脅してゐるのでござります、まあ、現在の母親を！」

……」

「あれにやれ！……」セメヨーン聖者は砂糖の大塊を指さした。

小僧は飛び出して、砂糖の塊りを掴まへ、それを寡婦の方へ抱へて行つた。

「お、まあ長老様！ 何といふ有難いことでございませう。まあ、こんなに頂いてどう致しませう！」と寡婦は泣くやうな聲で言つた。

「もつと、もつと！」とセメヨーン聖者はまだ施し物をさし圖するのであつた。

砂糖の塊りがもう一つ運ばれた。『もつと、もつと』聖者はまだ止めなかつた。三つ目の塊りに續いて、また四つ目が運んで來られた。やもめは四方から砂糖に取り圍まれて了つた。聖母寺院から派遣された僧侶は、ほつと溜息を吐いた。これだけの砂糖は、これまでの例に従へば、今日にも僧院へ入つて來べきものであつた。

「まあ、こんなに頂いて、どうしたら宜しうございませう！」寡婦はつゝまじやかに吐息をついた。「わたくし一人でこんなに頂載して……おなかを悪くしてしまひますよ！ これは何かのお告げでもございませうか、長老様！」

「さうに違ひない、きつとお告げなのだ。」群集のなかで誰かがかう言つた。

「あれにもう一斤やれ、もう一斤！」セメヨーン聖者はなか／＼承知しなかつた。

卓の上には、もう一つ大きな塊りが残つてゐたが、聖者は一斤だけやれと云ひつけた。で、寡婦はまた一斤貰つた。

「神様、神様！」と群集は溜息をついたり、十字を切つたりした。「たしかにお告げに違ひない！」

「それはまづ自分の心を愛と恵みで甘くして、それから現在自分の血を分けた、生みの子を訴へに來るがいゝ、といふやうな喩へでもあらうかな。」先刻、茶のもてなしを受け損ねた肥えた僧侶は、意地悪い自尊心の發作にかられて、われと説明の役を引受けながら、低いけれど得意さうな聲でかう言つた。

「まあ、方丈様、何を仰しやるのでござります。」と寡婦は不意に腹を立て出した。「だつて、あいつらはエルヒーシンの家が焼けた時、わたくしの頸に繩を掛けて、火の中へ引きずり込まうとしたではありませんか。あいつらはわたくしの箱の中に、死んだ猫を押し込んだではございませんか。さういふ風で、どんな亂暴でもし兼ねまじいのでござります……」

「追ひ出せ、追ひ出してさへ！」突然セメヨーン聖者は両手を振つた。

番僧と小僧は格子の向うへ飛び出した。番僧が寡婦の手を取ると、こちらは急におとなしくなつて、貰つた砂糖の塊りを振返り、振返り、戸口の方へ進んだ。砂糖は小僧が後から引張つて行つた。

「一つ取戻せ、取上げて來い！」傍に残つてゐる職人體の男に向つて、セメヨーン聖者はかう云ひつけた。

彼は一散に駆け出して、立つて行つた人々の後を追つた。やがて暫く經つてから、三人の給仕

は、一度やつて置きながら、また寡婦の手から取戻した、砂糖の塊りを一つ持つて、引つ返した。それでも寡婦は、大きなのを三つ持つて行つたのである。

「セメヨーン長老様、」うしろの戸のすぐ傍で、誰かの聲が響き渡つた。「わたくしは夢に鳥を見ました。鴉が水の中から飛び出して、火の中へ入つたのでございます。一體この夢はどういふ事でございますか？」

「寒さに向ふといふことだ。」セメヨーン聖者はかう答へた。

「セメヨーン長老様、どうしてあなたはわたしに、何ともご返事くだらないのでございます。わたしはもうずうつと前から、あなたに興味を持つてゐたのでございます。」とまた一行の婦人が言出した。

「聞いて見い！」その言葉には耳もかさず、膝を突いてゐる地主を指さしながら、セメヨーン聖者は出し抜けにかう言つた。

聞き役を仰せ附かつた僧侶は、容體ぶつて地主に近づいた。

「どんな悪い事をせられましたか？ 何かしろと言ひつかつた事でもありませんか？」

「争ひをしてはならぬ、わが手に自由をさすな、といふ事でございます。」かすれた聲で地主が答へた。

「その通り守りましたか？」

「守れません、自分で自分の力に負かされるのでございます。」

「追ひ出せ、追ひ出せ、箒で追ひ出せ、箒で！」セメヨーン聖者は両手を振り始めた。地主は刑罰の下るのを待たないで、ぱつと跳ね起きると、そのまゝ外へ飛び出した。

「こゝに金貨を残して行きました。」床の上から五ルーブリ金貨を拾ひ上げながら、僧侶はかう披露した。

「ほら、あれにやれ！」セメヨーン聖者は指で丸持ち長者をさし示した。

丸持ち長者は辭退する勇氣もなく、そのまゝ受取つて了つた。

「金に金を加へるとは。」僧侶は怵へ切れないでかう言つた。

「それから、この男に砂糖入りの茶をやれ。」突然セメヨーン聖者はマヴリーキイを指さした。給仕は茶を注いだが、間違へて、鼻眼鏡の洒落男に持つて行かうとした。

「高い方だ、高い方だ。」とセメヨーン聖者が口を出した。

マヴリーキイは杯を受取ると、軍人風の軽い會釋をして、飲みにかゝつた。なぜか知らないけれど、われ／＼一行はきやつ／＼と笑ひ轉げた。

「マヴリーキイさん！」だし抜けにリーザは、彼に向つてかう言ひ出した。「あの今まで膝を突いてた人が行つて了つたから、あなた代りに膝を突いて下さいな。」

マヴリーキイはげんさうに彼女を眺めた。

「お願いよ、後生だから、わたしの言ふ通りにして頂戴な。ねえマヴリーキイさん。」とつぜん彼女は執拗で片意地な熱した調子で、早口に言ひ始めた。「是が非でも膝について頂戴、わた

し是非とも、あなたの膝をついた様子が見たいんだから。もしそれがお厭なら、もうわたしの所へ来ないで頂戴。どうしても見たいの、どうしても……」

悪 どういふつもりで彼女がこんな事を言つたのか、それはわたしにも分らない。しかし、とにかくまるで發作でも起つたやうに、頑固一徹な調子で言張るのだつた。これは後でまた話すつもりだが、このごろ殊に烈しくなつたりザのかうした氣まぐれな要求を、マヴリーキイは自分に對する盲目的憎悪の突發と解釋してゐた。とは言へ、決して腹立ちまぎれや何かではない。それどころか、彼女は常に彼を尊敬し、愛慕してゐるくらゐで、それは彼自身も承知してゐた。つまり、何か一種特別の無意識的な憎悪で、彼女自身もどうかした拍子には、抑制することが出来ないらしかつた。

靈 彼は自分の持つてゐた杯コップを、うしろに立つてゐるどこかの老婆に、無言のまま手渡しして、格子の扉を開けると、許しも受けないで、セメヨン聖者の居場所となつてゐる仕切りの中へ入つて行つた。そして、一同の眼前に姿を曝しながら、部屋のまん中にいきなり膝を突いた。察するところ、満座の中でリーザから無作法な、人を馬鹿にした態度を示されたために、その純な優しい心は極度まで震撼されたのだらう。或ひは自分から強つて言張つては見たものの、實際かうした見すばらしい男の姿を見たら、リーザも自分で恥づかしくなるだらう——とこんな風に考へたかも知れない。勿論、こんな正直な危い方法で、女を匡正しようなどと決心し得るのは、彼を措いて恐らくほかに二人となからう。彼は持前の泰然自若とした、鹿爪らしい表情を顔に浮かべな

がら、細長い無恰好な可笑しい體つきで、ぢつと膝をついてゐた。けれど、われ／＼一行もさすがに笑はなかつた。かうした突飛な行爲が、ほとんど病的な効果エフェクトを與へたのである。一同はリーザを見守つてゐた。

「膏おぐらを、膏おぐらを！」とセメヨン聖者は呟いた。

リーザは急にさつと顔を蒼くした。そして、あつといふ叫びを發しながら、格子の向うへ飛んで行つた。このとき突嗟の間に、奇怪なひすてりいじみた一場の光景が演出された。彼女は一生懸命にマヴリーキイを起さうとして、両手でその肘を引立てるのであつた。

「お起きなさい、お起きなさい！」と彼女は夢中になつて叫んだ。「起きて下さい、さあ、今すぐ！ まあ、よく膝なんか突けたもんだわ！」

マヴリーキイは膝を起した。彼女は両手で肘の少し上をぢつと握んで、穴の明くほど相手の顔を見つめてゐた。恐怖の色があり／＼とその眼に讀まれた。

「色目を事とする輩やからぢや、色目を事とする輩やからぢや！」もう一どセメヨン聖者は繰返した。

彼女はたうとうマヴリーキイを格子の向うへ引戻した。一行中に烈しい動搖が生じた。例の婦人はかうした不穩の氣分を、揉み消さうとも思つたらしく、依然としてわざとらしい微笑を浮かべながら、黄色い甲走つた聲でセメヨン聖者に向つて、三たび繰り返してかう言つた。

「どうしたのでございます、セメヨン上人様、わたしに何か『ご宣託』を聞かして下さいませんの？ わたしすつかり當てにしてをりましたのに。」

「え、貴様を……」不意にセメヨーン聖者は、この婦人に向つて、思ひ切り猥雑な罵詈を投げつけた。しかしその言葉は恐ろしいほど明瞭に、擗猛な勢で發せられたのである。一行の婦人たちは黄色い聲を上げながら、一目散に外へ飛び出した。男たちはきやつくと笑ひ興じた。それでわれわれのセメヨーン聖者訪問も、終りを告げたのである。

ところがこゝにもう一つ、極めて奇怪な、謎のやうな出来事が起つたとのことである。白狀するが、わたしがこの遠征をあゝ詳しく書いたのも、實はそのためなので。

悪
人の話によると、一同がどや／＼入亂れて駆け出したとき、マヴリーキイに助けられたリ
ーザが、群集の押し合ふ狭い戸口の所で、思ひがけなく、ニコライにばつたり行き會つたのである。斷つて置くが、例の日曜の朝の卒倒事件以來、二人はたび／＼顔を合はせはしたけれど、まだ一度も傍へ寄つて、口を利き合つたことはない。わたしは二人が戸口で落合つたのを見た。二人はその時ちよつと立止つて、何だか奇妙な目つきで互に顔を見合せた——やうに感じられた。しかし混雑の中で、見誤つたか知れない。しかし人々の主張——しかも恐ろしく眞面目に主張するところに依ると、リーザはちつとニコライの顔を見つめると、急に片手を振上げて、相手の顔と平行する邊まで持つて行つた。もしニコライが身を轉さなかつたら、確かに顔をぶたれたに相違ない——とかう言ふのである。事によつたら、彼の顔の表情が氣に入らなかつたのかも知れないし、またつい今しがたマヴリーキイと、あゝした挿話を演じた後だから、何か冷笑のやうなものでも目にとまつたのかも知れない。白狀するが、わたしはなんにも見なかつた。が、その代り

一同の者が見たと主張した。尤も、あの混雑のなかで、一同がそんな事を見る筈はない。たゞ二三の者に過ぎなかつたらう。しかし、當時わたしはその話を本當にしなかつた。たゞ今でも覺えてゐるが、歸途ニコライは始めから了ひまで、いくぶん蒼い顔をしてゐた。

三

ほとんどそれと同時に、否それと同日に、ステパン氏とヴルグーラ夫人の會見が、遂に事實となつて現れた。これは夫人が前から考へてゐたことで、元の親友たるステパン氏へも、とうから通じて置いたのだが、どういふ譯か今まで延び延びになつてゐた。この會見はスクヴレーシニキイで行はれた。ヴルグーラ夫人はのぼせ上がつてせか／＼しながら、郊外の持家へやつて來た。今度の祭は貴族團長夫人の邸で催されることに、前日いよ／＼決まつて了つたので、夫人はすぐさま特別敏活な頭を働かして、今度の祭の後で、改めて別な催しをスクヴレーシニキイで開き、もう一度町ぢうの者を呼び集めよう、これには誰ひとり異議を唱へるものはない筈だ。その時こそは誰の家が一番いゝか、どちらが上手に客も款待すか、どちらが趣味のある舞踏會を催す腕を持つてゐるか、事實に於いて確めることが出来るのだ、かう腹の中ですつかり決めて了つた。全體に夫人はまるで人が變つたやうだつた。以前の胃すべからざる威嚴を備へた貴夫人（これはステパン氏の言ひ草なので）の佛はなくなつて、ごくあり觸れた、氣紛れな、社交界の婦人になり切つてゐた。しかし、それはたゞそんな風に思はれただけかも知れぬ。

からつばな家へ乗り込むと、夫人は昔から少しも變らぬ忠僕のアレクセイと、裝飾の方の専門家でしかもなか／＼苦勞人のフォームシカを従へて、部屋々々を一巡した。いろ／＼相談やら評定やらが始まつた。町の家からどんな家具を持つて来ようかだの、道具や額はどんなのにしてどこへ置かうかだの、温室や花類はどんなにしたら一ばん都合がいゝかだの、新しいカーテンはどこへ掛けようかだの、酒場はどこへ設けようか、それも一つでいゝだらうか、二つにしようかだの、そんな風のことだつた。丁度さうした面倒くさい相談の最中に、夫人はふいと思ひついて、ステパン氏へ迎への馬車を送つた。

こちらはもう以前から報らせを受けてゐるので、ちやんと覺悟を決めてゐた。そして、かうした不意の招きを毎日のように待構へてゐた。彼は馬車に乗りながら十字を切つた。いま將に自分の運命が決しられやうとしてゐるのだ。來て見ると『親友』は、大廣間の壁龕の中にある小さな長椅子に腰を掛けて、小さな大理石の卓を前に控へながら、鉛筆と紙を持つて構へてゐた。フォームシカは尺度もどしを持つて、壁の上の廻り廊下や窓の高さを計つてゐた。ブルグーラ夫人は數を書き留めては、紙のはじになにか覺え書きをしてゐた。そして、仕事の手を休めようとせず、横向きにステパン氏に會釋かいせきした。こちらが何か挨拶の言葉を口の中で述べた時、忙しげに手を差し伸べて、見向きもせずかたに傍への椅子を指さした。

「わたしはぢつと坐つて、『心をしめつけられるやうな思ひをしながら』五分間ばかり待つてゐた。」と彼は後になつて話して聞かせた。「あの時の夫人は、二十年このかた見馴れた夫人と違

つてゐた。もう一切は終つたといふ、一點疑惑の餘地のない確信が、夫人をも驚かすほどの力をわたしに與へてくれた。實際、夫人はこの最後の會見で、わたしの斷乎たる態度に一驚を吃してゐたよ。」

ブルグーラ夫人は不意に鉛筆を卓の上に置いて、くるりとステパン氏の方へ振向いた。

「ステパンさん、わたし達は一つ眞面目に話さなくちやなりません。きつとあなたは例の華しい言ひ廻しや、いろんな警句を用意していらしたと思ひますが、もう一足飛びに用件に移つた方がよかありませんか、ね、さうでせう？」

彼はぎよつとした。夫人はあまり性急に自分の態度を闡明しようとしたので、何を言ひ出すかといふことは、もうちやんと見え透いてゐた。

「まあお待ちなさい。しばらく黙つて、まづわたしに言はせて下さい。その後であなたも何など仰しやい。尤も、あなたにどんな返事が出来るか、ちよつと見當がつきませんがね。」と彼女は早口に言ひ續けた。「千二百ルーブリといふあなたの年金は、わたし自分の神聖な義務だと思つてゐます、えゝあなたの生涯の終りまで。尤も、神聖な義務など持出すことはありませんがね。」と彼も、たゞ契約の履行です。その方がずつと實際的です、さうぢやありませんか？ もしなんでもしたら、一筆書いてもいゝですよ。わたしの死んだ時には、特別な處置を取ることになります。けれど、そのほかあなたは今わたしから、住まひと召使と生活費を受けてをられます。これをお金に直して見ますと、千五百留になります。これにまた臨時費の三百留を加へますと、ちやうど三

千留かつきりになります。あなたには一年分これだけで十分でせう？ 少くはないでせうね？ もつとも、ごく／＼臨時の場合には、また増して上げますよ。ですから、わたしの召使どもを返してください。自分で勝手に、どこでなりと暮して下さい。彼得堡でもよし、莫斯科でもよし、それともまた、こゝでもよろござんすが、たゞわたしの家はいけません、よろござんすか？」

悪

「ついこのあひだ同じあなたの口から、同じやうな執拗な性急な調子で、まるつきり別な要求が発せられました。」愁はしげなしかも明晰な調子で、ステュパン氏はゆつくりとかう言つた。

「で、わたしは諦めて……あなたのお氣に入るやうにと、哥薩克踊りを踊りました。 Qui la Com paraison peut être permise. C'était comme un petit cozak du Don, qui sautait sur sa propre tombe. (さうです、もし譽論が許されるならば、ちやうど自分の墓の上で踊りを踊る。ドン哥薩克のやうなものです)」

靈

「お待ちなさい、ステュパンさん。あなたは恐ろしく口數が多うござんすね。あなたは踊りを踊つたどころか、かへつて新しい頸飾をして、新しい襯衣を着込み、新しい手袋を箆めて、頭に油をつけたり香水を匂はしたりしながら、わたしの所へ出ていらつしやいました。え、わたしは請け合つてもよろござんすわ、あなたはあの結婚がしたくて堪らなかつたのです。それはあなたの顔に描いてありました。そして、全くのところ、思ひきつて下品な表情でしたよ。わたしがその時すぐにこの事を言はなかつたのは、たゞ思ひやりのためだつたんですよ。が、とにかく、あなたは結婚を望んでゐました、え、望んでゐましたとも、わたしのことだの、ご自分の花嫁さ

んのことなど、内證の手紙の中に、さん／＼聞き苦しい文句をお書きになつた癖にね……今度はあんな事とはまるで違ひます。そのなんとかの墓の上で踊るドン哥薩克とやらは、一たい何のため引合ひにお出しになつたのです？ なんの譬喩だかちつとも分かりやしない。それどころか、あなたは決して死んだりなんかしないで、末長くお暮しなさい、出来るだけ長くお生きなさい。わたしはそれを嬉しく思ひますわ。」

「養老院でね？」

「養老院で？ 三千年ループリの年收を持つて養老院へ行く人は、あまりないやうですね。あつ、思ひ出した。」と夫人はにやりと笑つた。「本當にいつだつたかピョートルさんが、養老院のことで冗談を言つたことがありますよ。まあ、本當にそれは何か特別な養老院だつたわけ。一ど考へて見る値うちがあるやうだ。何でも、それはごく立派な人達のために建てたもので、陸軍大佐くらの人もあるさうだし、ある將軍も入るとか言つてさうですよ。もしあなたがご自分の財産を、すつかり持つてそこへお入んなすつたら、いろんな人達に仕へられて、十分氣樂に満足に暮して行けるでせうよ。そこであなたは科學の研究に従ふことも出来れば、プレフェランス(歌留多の勝負)の仲間を見つける事も出来ませうし……」

「Passons (おせらうよ)。」

「『Passons ですよ？』」ブルワラ夫の顔はびくりと引つ吊つた。「さういふ譯なら、もうそれでお了ひですよ。わたしは通告をしてしましたから、今後わたし達は全く別々に暮すこと

にしませう。」

「それでお了ひですつて？ あの二十年の生活から残つたのが、たつたそれだけなんですか？
それがあなたの最後の告別の辭なんですか？」

「あなたは恐ろしい咏嘆ずきですね、スチュエバンさん。そんな事は今まるで流行りませんよ。
あの人達の言ふことは下品ですが、その代りざつくばらんですよ。あなたは何かと言へば、すぐ
二十年を持ち出すんですね。あれは互に自尊心を煽り合つた二十年です。それつきりの話して
す！ あなたがわたしに下すつた手紙はどれもこれも、わたしに宛てたものではなくつて、子々
孫々へのこすつもりで書いたのです。あなたは修辭學者で親友ぢやありません。友情などといふ
ものは體裁のいゝ飾り言葉で、本當は溝水の打ちまけつこですよ……」

「あゝ、まるつきり他人の口眞似だ……よくまあお稽古が固まつたものですね！ あいつ等は
もうあなたにまで、ちやんと自分の制服を着せたんですね！ あなたもやつぱり得意であるんで
すか！ あなたもやつぱり太陽の國の佳人になつたんですか？ あなた、あなた、何といふつま
らない菜つ葉汁のために、尊いご自分の自由を賣つて了つたのです？」

「わたしは他人の口眞似をする鸚鵡ぢやありませんよ。」とブルヴァーラ夫人はかつとなつた。
「えゝ、全くですよ、わたしにだつて自分の言葉は、うんと溜つてゐますからね。一體この二十
年間に、あなたはわたしをどうして下すつたのです？ わたしがあなたのために取り寄せた書物
でさへ、あなたは厭がつて見せなかつたぢやありませんか。その本ももし製本屋といふものがあ

なかつたら、頁も切らずに打つちやられる筈だつたんですよ。また初めの間わたしを指導するや
うにお願いした時、あなたは一たい何を讀ましてくれました？ いつも／＼カップフィッシュの一
點張りぢやありませんか。あなたはわたしの進歩にまで嫉妬やまもらを焼いて、手加減をしてゐたのです。
ところが、あなたは皆の笑ひ草になつてゐますよ。實のところ、わたしはいつもさう思つてゐま
した——あなたはほんの文學批評家に過ぎません。わたしが彼得堡へ行く途中、雜誌發行の計畫
を洩らして、それに一生を捧げるつもりだとお話したら、あなたはすぐに皮肉な目つきでわたし
を見つめて、急に恐ろしく高慢におんなすつたぢやありませんか。」

「それは思ひ違ひです、それは思ひ違ひです……わたし達はあのととき當局の注視を恐れたので
す……」

「いゝえ、本當にその通りでした。彼得堡では當局の注視なんか、恐れる筈がなかつたのです
よ。その後あの二月になつて、解放令の報知が傳はつた時、あなたは突然あをくなつて、わたし
の處へ飛んで来て、さつそく證明書の代りになる手紙を書いてくれと、わたしに強請ねだり出したの
です。で、こんど計畫してゐる雜誌は全然あなたに無關係だ、遊びに来る若い人達はわたしのお
客で、あなたを訪ねて来るのぢやない。あなたはたゞの家庭教師で、俸給の受取り残りがあるの
で、わたしの家に暮してゐるのだ、とこんなふう書いて上げました。憶えてゐらつしやるでせ
う！ あなたは一生涯、立派な行ひばかりしてゐらつたのですよ、スチュエバンさん。」

「それはちよつとした氣の迷ひです、面と向き合つた時だけのことです。」と彼は悲しげに叫

んだ。「しかし一たいそんな些細な感情のために、何もかも破り棄てて了はなくちやならないのですか？ 一たいあの長い間の二人の関係から、なに一つ残つたものはないのでせうか？」

「あなたは恐ろしく勘定高いこと。あなたはまだわたしに何か貸しを押し付けようとなさるんですね。あなたは外國から歸つた當座、わたしを一段高いところから見下ろして、わたしに碌々ものも言はせなかつたぢやありませんか、その後わたしは自分で出かけて行つて、シクスチンの聖母の印象を話し出したら、あなたはろくそつぽ聞きもしないで、ご自分の頸飾を見ながら、高慢さうににたりと笑ひました。まるでわたしなどはあなたと同じ感情を、抱くことが出来ないものか何ぞのやうに……」

「それは違ひます、たぶん違ふ筈です…… J'ai oublié (わたしは忘れたが)」

「いゝえ、その通りでした。それに、わたしにご自慢なさる譯は少しもありませんよ。なぜつて、そんなことは詰らない寢言ですもの、あなたの考へ出した出たら目に過ぎないんですもの。今どきの人は誰だつて、全く誰一人だつて、聖母に夢中になるものはありません。そんなことに暇をつぶすのは、手の着けられないやうな老人連ばかりです。それはもう立派に證明されてゐます。」

「もう證明されてますつて？」

「あんな聖母なぞ何の役にも立ちやしません。この水呑は有益なものです。だつて、水を注ぐことが出来ますものね。この鉛筆は有益なものです。なぜつて、なんでも書きとめることが出来

るぢやありませんか。ところが、あの繪の女なんぞは、實際にゐる女の中でも一番まづい顔ですよ。まあ假りに林檎を一つ描いて、すぐその傍へ本物の林檎を並べてご覧なさい……一たいあなたはどちらを取ります？ 必ず間違ひつこないでせう。まあ、今どきの論理は、すべてかういふ風に歸納されるんですよ。自由研究の曙光が、理論の上にも照らしたのです。」

「さうです、さうです。」

「あなたは皮肉な笑ひ方をなさるんですね、もう一つ例へて言つて見ませう。一たいあなたは慈善といふ事に就いて、わたしに何と仰しやいました？ ところが本當はね、慈善の愉しみといふものは、傲慢な背道徳な愉しみです。金持が自分の富や権力や、自分と貧者との價値の比較、かういふものに依つて感じる愉しみなのです。慈善は與へるものをも、また受ける者をも墮落させて了ひます。しかも貧困を助長させることになりすから、目的を達することも出来ないのです。ちやうど博奕打ちが一獲千金を夢みながら、歌留多卓の周りに集るやうに、働く事の嫌ひななまけ者が、慈善家の周りにうよくたかるんですからね。ところが、慈善家の抛つてやる些かの小錢なんか、全財産の百分の一にも足りないぢやありませんか。あなたは生涯のあひだ、澤山の施しをしてやつたことがありますか。八十哥より大きいことはありませんまい、よく考へて思ひ出してご覧なさい。あなたが一番お了ひに施しをなすつたのは、二年ばかり前でしたね、いえ四年くらゐ経つてるかも知れない。あなたはたゞ大きな聲で怒號して、仕事の邪魔をなさるばかりですよ。慈善などといふことは今日の社會でも、法律でも禁止すべきなんです。新しい社

會組織では、てんで貧乏人なくなつて了ひます。」

「おゝ、まるで他人の言葉を鵜呑みにしたのだ？ ぢや、もう新しい社會組織にまで行つて了つたのですか？ あゝ神様、この不幸な婦人をお助け下さい！」

「えゝ、そこまで行つて了つたんですよ、ステュパンさん。あなたはいま誰一人知らぬ者もないやうなすべての新思想を、精出してわたしの目から隠すやうにしてゐらつしやいました。しかも、それはわたしの心を支配したさの、やきもち根性から出たことなのです。今ではあのユリヤでさへ、わたしより百歩もさきへ出てゐます。けれど、今こそわたしもすつかり見抜きました。わたしわね、ステュパンさん、出来るだけあなたを辯護したんですよ。あなたは全くみんなから攻撃されてゐますよ。」

悪

「澤山です！」と彼は席を立たうとした、「澤山です！ で、わたしは今これ以上あなたに何を祈つたらいいのでせう？ 悔悟でせうか？」

「まあちよつとお坐んなさい、ステュパンさん、わたしまだあなたにお訊ねする事があるんですよ。あなたは今度の文學會で、何か講演を依頼されてゐらつしやるでせう。これはわたしの骨折りでさういふ風になつたのですよ。一たい何を講演なさるおつもりですか？」

「言ふまでもありません、あの女王の中の女王です、あの人類の理想です。あなたのお説では杯コップや鉛筆ほどの値うちもない、シクスチンの聖母マドンナです。」

「ぢや、あなたは歴史の話をなさるんぢやないんですか？」とワルヴァラ夫人は悲しさうな驚

きを浮かべた。「そんなことを聴く人はありやしませんよ。本當にあなたは聖母マドンナの一點ばりですね！ 聴く人をみんな居眠りさして了ふなんて、随分いゝ好奇もつぎぢやありませんか。ねえステュパンさん、本當にわたしはあなたの身になつて、心配してゐるんですよ。もしあなたが西班牙歴史の中から、何か短くて氣の利いた、中世紀の宮廷生活の物語りを講演なすつたら、どんなにいゝでせう。物語といふより、ちよつとした逸話ですね、それにまたほかの逸話で色をつけた上、ご自分で工夫した警句でも添へてご覧なさい。あの時分には宮廷生活が華やかで、いろんな面白い貴婦人がゐたり、毒殺事件があつたりしたのですからね。カルマジノフもさう言つてましたよ。西班牙歴史のなかから、何か氣の利いた講演が出来ないといふのは、よつぽど變な話だつて。」

「カルマジノフ？ あの書き盡して筆の涸れた馬鹿者が、わたしのために題材テーマを捜してくれらつて！」

「カルマジノフ、あの人はほとんど國家的人物と言つてもいゝくらゐです！ あなたはあまり口が不謹慎すぎますよ、ステュパンさん。」

「あなたのカルマジノフなんか、あんな奴は時代おくれの、書きつくして種切れのした、意地悪の女腐れです！ あなたシニエール、あなたシニエール、あなたはもうとうから、あんな連中の奴隷になつてゐたのですか、おゝ何といふことだ！」

「わたしは今だつて、あの男の尊大振りが厭で堪らないんですけれどね、それでもあの人の頭脳には、當然敬意を拂はない譯に行きません。繰り返して言ひますが、わたしは一生懸命に、出

来るだけあなたを辯護して来たんですよ。そんなにはが非でも自分を滑稽な、面白くない人だと思はして、一たい何になるんです！ そんなことは止めて、一つ過去の時代の代表者らしく、品位のある微笑を浮かべながら、悠然と演壇へ上つて、三つばかり逸話をお話下さいな。時々、あなたでなくてはといふやうな話し方をなさる、あんな風な獨特の皮肉を縦横に發揮してね。あなたは老人でも構ひません、前世紀の遺物でも構ひません、またあの人達に取り残されてるとしても構ひはしません。たゞこの事を前置きでちよつと自認して置いたら、あなたが愛嬌のある、人の好い、機智に富んだ老人だといふことを、みんなが知つてくれますから……つまり、あなたは舊時代の人物には相違ないけれど、第一流の人物であるだけに、今まで追隨してゐたある種の思想の醜惡な點を、相當に認識するだけの頭腦を持つてらつしやるのです。さあ、どうかわたし言ふ事もきいて下さい、お願ひですから。」

「Chère、澤山ですよ！ 拜み倒すのは止して下さい、わたしは出来ません。わたしは聖母の話をするのです。一つ大嵐を呼び起します、その嵐で、やつ等をすつかり打ち破るか、それとも自分一人が斃されるかです！」

「確かにあなた一人斃されるんですよ、ステュパンさん。」

「それがわたしの運命なのです。あたしはあの卑しい奴隷の話をするのです。手に鉄を持つて、第一番に梯子を攀ぢ上り、平等と羨望と、そして……消化の名をもつて、偉大なる理想の神しい面^{おも}わを掻き裂かうとする、あの鼻持のならぬ放埒な下司男の話をするのです。わたしは自

分の呪ひを天下に轟かせなければ止みません、その時こそ、その時こそ……」

「癲狂院おくりですか？」

「或ひはさうかも知れません。しかしどつちにしても、わたしが負けるか、あるひは勝利者となるかです。わたしはその晩さつそく囊を取つて……あの乞食のやうな囊を取つて、わたしの財産をすつかり置いて行きます。あなたの贈り物も、年金も、未來の幸福のお約束も、すつかり遺したまふ、徒歩でとぼく／＼出て行きます。そして、どこか商人の家のお抱へ教師で一生を終るか、でなければ、どこかの垣の下で餓死します。わたしはもうさう言つたのです…… *Alen facta*

^{est} (骸子は投げられたり)

彼は再び立上つた。

「わたしさう信じてゐました、目をぎら／＼輝かせながら、ブルヴァーラ夫人も同様に立上つた。「わたしもろづつと前からさう信じてゐました……あなたはとどのつまり、わたしとわたしの一家を讒誣して、泥を塗るために、たゞそのみを目的に生きてらしたんです！ あなたの仰しやる商人のお抱へ教師とか、垣の下のたれ死とかは、一たい何の意味ですか？ 面當てです、讒誣です、え、それつきりです！」

「あなたはいつもわたしを輕蔑してゐらした。けれども、わたしは自分の姫に對する騎士のやうに、美しく生涯を終るつもりです、なぜと言つて、わたしはいつもあなたのご意見を、何よりも一ばん尊重してゐたからです、もう今後なんにも頂戴しないで、利慾を離れて崇拜します。」

「何て馬鹿なことを！」

「あなたは一度もわたしを尊敬して下さらなかつた。わたしには數限りない弱點があつたかも知れませんが、さうです、わたしはあなたを食ひ潰しました。(これは虚無主義の言葉を使つて言つてゐるんですよ。)しかし食ひ潰すといふことは、決してわたしの行爲の最高の標語ぢやなかつたのです。これは自然とそんな風になつたのです。なぜだかわたしにも分かりません……わたしはいつもさう思つてゐました。二人の間には何かしら食物より以上に、高尚なものが残るだらうと思つてゐました。そして、一度も、全く一度も卑劣な考へを抱いたことはありません。さあ、そこで事態を匡正するために、いよ／＼旅の道に上るのだ！ 晩い旅路に上るのだ！ 外は秋が更けて、霧が野の上に垂れ、凍つた老人のやうな霜が、わたしの行手を蔽つてゐる。そして風は墓の近いことを呻き訴へる……しかし旅路に上らねばならぬ。新しい旅路へ、

心は清き愛に充ち

甘き空想おもひに身は浸り……(ブーシキン「貧しき騎士」)

お、さらば、わが空想よ！ 二十年よ！ *Alen jacta est* (骸子は投げられたり。)

彼の顔は、急にはふり落つる涙に濡れた、彼は自分の帽子を取つた。

「わたし羅典語は少しも知りませんよ。」 一生懸命に心を強く持ちながら、ワルワラ夫人はかう言つた。

實際、夫人自身も泣き出したかつたのかもしれない。けれども、腹立たしさと氣紛れがもう一

ど勝を占めた。

「わたしはね、たつた一つだけ知つてる事がありますの。ほかではありません、そんな事はみんな子供らしい駄々ですわ。あなたはそんな利己主義エゴイズムに充ちた脅し文句を、とても實行するやうな氣力がありやしません。あなたは決してこの商人の處へもいらつしやりやしませんよ。やつぱりわたしから年金を受取つて、あのやくざな友達を火曜日ごとに家へ集めながら、安氣にわたしの手に抱かれて死ぬんですよ。さようなら、スチエパンさん」

「*Alen jacta est!* (骸子は投げられたり。)」 恭しく夫人に一揖して、彼は昂奮のあまり生きた心地もなくわが家へ歸つて行つた。



岩波文庫
974—975

昭和九年三月九日發行

副行

發行所

東京市神田區
一ツ橋通町三番地

岩波書店

電話 〇〇一八七〇
九段一〇二番(小賣部専用)
振替口座東京二六二四〇番

譯者

米川正夫

發行者

東京市神田區一ツ橋通町三番地
岩波茂雄

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十七番地
白井赫太郎

精興社印刷

惡靈第二編(上) ***
定價四十錢

(覆本製本)

讀書子に寄す

岩波文庫發刊に際して

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繋縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推舉するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのちるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

既刊書目

國文學

新萬葉集 上卷 佐佐木信綱編	新萬葉集 下卷 佐佐木信綱編	白萬葉集 上卷 佐佐木信綱編	白萬葉集 下卷 佐佐木信綱編	古事記 幸田成友校訂	訓日本書紀 上卷 黒板勝美編	訓日本書紀 中卷 黒板勝美編	訓日本書紀 下卷 黒板勝美編	記紀歌謠集 武田祐吉校註	古語拾遺 加藤玄智校訂	水鏡 和田英松校訂	大鏡 和田英松校訂	增鏡 和田英松校訂	三條西榮花物語 卷上 三條西公正校訂	三條西榮花物語 卷中 三條西公正校訂	三條西榮花物語 卷下 三條西公正校訂	竹取物語 並附録 鳥津久基校訂	平家物語 上卷 山田孝雄校訂	平家物語 下卷 山田孝雄校訂	源氏物語 (一) 鳥津久基校訂	源氏物語 (二) 鳥津久基校訂	源氏物語 (三) 鳥津久基校訂	源氏物語 (四) 鳥津久基校訂	土佐日記 池田龜鑑校訂	紫式部日記 池田龜鑑校訂	更級日記 西下經一校訂	枕草子(春曙抄) 上卷 池田龜鑑校訂	枕草子(春曙抄) 中卷 池田龜鑑校訂	枕草子(春曙抄) 下卷 池田龜鑑校訂	倭漢朗詠集 山田孝雄校訂	梁塵秘抄 佐佐木信綱校訂	古今和歌集 尾上八郎校訂	撰新山家集 佐佐木信綱校訂	新古今和歌集 佐佐木信綱校訂	新金槐和歌集 增訂 齋藤茂吉校訂	藤原定家集 附定家 佐佐木信綱校訂	法華義疏 上卷 聖徳太子御製	法華義疏 下卷 聖徳太子御製	法華義疏 下卷 聖徳太子御製	正法眼藏隨聞記 懷徳 和辻哲郎校訂	日蓮上人抄 姉崎正治校註	歎異抄 金子大榮校訂	徒然草 西尾實校訂	方丈記 山田孝雄校訂	花傳書 野上豊一郎校訂	申樂談義 野上豊一郎校訂	能作書・覺習條條 野上豊一郎校訂	至花道三部集 野上豊一郎校訂	入木道三部集 野上豊一郎校訂	奥の細道その他 伊藤松字校訂	芭蕉七部集 伊藤松字校訂
----------------	----------------	----------------	----------------	------------	----------------	----------------	----------------	--------------	-------------	-----------	-----------	-----------	--------------------	--------------------	--------------------	-----------------	----------------	----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-------------	--------------	-------------	--------------------	--------------------	--------------------	--------------	--------------	--------------	---------------	----------------	------------------	-------------------	----------------	----------------	----------------	-------------------	--------------	------------	-----------	------------	-------------	--------------	------------------	----------------	----------------	----------------	--------------

芭蕉連句集 小宮豊隆編	芭蕉俳句集 頼原退蔵校註	燕村七部集 伊藤松字校訂	風俗文 選 伊藤松字校訂	鶉 衣 石田元季校訂	おらが春・我春集 萩原井泉水校訂	柳多留 上卷 西原柳雨校訂	柳多留 中卷 西原柳雨校訂	柳多留 下卷 西原柳雨校訂	萬載狂歌集 野崎左文校訂	德和歌後萬載集 野崎左文校訂	松の葉 藤田徳太郎校註	松の葉 藤田徳太郎校註	閑吟集 狂言小歌集 藤田徳太郎校註	好色一代男 西田萬吉校訂	好色一代女 西田萬吉校訂	好色五人女 西田萬吉校訂																	
日本永代藏 和田萬吉校訂	世間胸算用 和田萬吉校訂	西鶴織留 和田萬吉校訂	武家義理物語 和田萬吉校訂	武道傳來記 和田萬吉校訂	本朝櫻陰比事 和田萬吉校訂	椿説弓張月 上卷 和田萬吉校訂	椿説弓張月 中卷 和田萬吉校訂	椿説弓張月 下卷 和田萬吉校訂	國性爺合戦 近松門左衛門作	會我會稽山 近松門左衛門作	心中天の網 和田萬吉校訂	胡蝶物語 和田萬吉校訂	浮世風呂 和田萬吉校訂	浮世床 和田萬吉校訂	東海道膝栗毛 十返舎一九作	酒落本集 高木好次校訂	註良寛詩集 原田勘平校訂																
加賀 鶯 河竹繁俊校訂	赤垣源藏・仲光 河竹繁俊校訂	忍ぶの惣助 河竹繁俊校訂	縮屋新助 河竹繁俊校訂	孝子善吉 河竹繁俊校訂	鼠小僧 河竹繁俊校訂	實録先代萩 河竹繁俊校訂	お静お仙 河竹繁俊校訂	お森お小 河竹繁俊校訂	鳩の平右衛門 河竹繁俊校訂	小説・戯曲・詩歌・隨筆・評論	道 草夏目漱石著	行 草夏目漱石著	漾 人夏目漱石著	草 集夏目漱石著	坊つちやん 夏目漱石著	硝子戸の中 夏目漱石著	出家とその弟子 倉田百三著	布施太子の入山 倉田百三著	幸福 武者小路實篤著	そ の 妹 武者小路實篤著	人間萬歳 武者小路實篤著	友 情 武者小路實篤著	煤 煙 森田草平著	波 山本有三著	病 尺 正岡子規著	墨 一滴 正岡子規著	仰 錄 正岡子規著	子 集 正岡子規著	左千夫歌集 齊藤茂吉選	左千夫歌論抄 齊藤茂吉編	長塚節歌集 齊藤茂吉選	上田敏詩抄 茅野蕭々編	晚翠詩抄 土井晚翠著

明 暗 上卷 夏目漱石著	明 暗 下卷 夏目漱石著	五重塔 幸田露伴著	風流佛・一口劍 幸田露伴著	自然と人生 徳富蘆花著	二人女 房尾崎紅琴著	觀音岩 前篇 川上眉山著	觀音岩 後篇 川上眉山著	に け べ 樋口一葉著	うたかたの記 他三篇 鷗外著	護持院ケ原の敵討 鷗外作	新曲浦島 島坪内逍遙著	新曲赫映 姫坪内逍遙著	運命論者 他二篇 國木田獨步著	源をぢ 他二篇 國木田獨步著	號 外 他六篇 國木田獨步著	櫻の實の熟する時 島崎藤村著	千曲川のスケッチ 島崎藤村著
飯倉だより 島崎藤村著	春を待ちつゝ 島崎藤村著	生ひ立ちの記 島崎藤村著	蒲團・一兵卒 田山花袋著	田舎教師 師田山花袋著	小僧の神様 他十篇 志賀直哉著	和解 或る男 志賀直哉著	其 姉 志賀直哉著	陸奥直次郎 長興善郎著	青銅の基督 長興善郎著	偷 盜 芥川龍之介著	侏儒の言葉 芥川龍之介著	河 童 芥川龍之介著	厭世家の誕生 日佐藤春夫著	入江のほとり 正宗白鳥著	生まざりしならば 正宗白鳥著	大石良雄 野上彌生子著	海神丸 野上彌生子著
出家とその弟子 倉田百三著	布施太子の入山 倉田百三著	幸福 武者小路實篤著	そ の 妹 武者小路實篤著	人間萬歳 武者小路實篤著	友 情 武者小路實篤著	煤 煙 森田草平著	波 山本有三著	病 尺 正岡子規著	墨 一滴 正岡子規著	仰 錄 正岡子規著	子 集 正岡子規著	左千夫歌集 齊藤茂吉選	左千夫歌論抄 齊藤茂吉編	長塚節歌集 齊藤茂吉選	上田敏詩抄 茅野蕭々編	晚翠詩抄 土井晚翠著	

全グリニ童話集第七 金田一 譯 ★★
 ゲエテの對話抄 エツケルマン著 ★★
 春の目ざめ 野上豊一郎 譯 ★★
 埋木 キリシエネル 譯 ★★
 トオマス・マン短篇集1 實吉捷郎 譯 ★★
 トオマス・マン短篇集2 實吉捷郎 譯 ★★
 祖 妣 岡本修助 譯 ★★
 みれん シュニツツラ 譯 ★★
 アナトール 小宮豊隆 譯 ★★
 青い鳥 メーテルリン 譯 ★★
 ポリウクト コルネイ 譯 ★★
 人間嫌ひ モリエール 譯 ★★
 マノン・レススコオ アベ・ブレゾ 譯 ★★
 スタン赤と黒上巻 桑原武夫 譯 ★★
 ダール赤と黒下巻 桑原武夫 譯 ★★
 従兄ボンス 上巻 水野亮 譯 ★★
 従兄ボンス 下巻 水野亮 譯 ★★
 知られざる傑作 水野亮 譯 ★★
 (他五篇)

カ ル メ ン 杉 捷夫 譯 ★★
 コ ロ ン バ 杉 捷夫 譯 ★★
 エ ト ル リ ア の 盃 杉 捷夫 譯 ★★
 ノ ア ・ ノ ア 前川堅市 譯 ★★
 日の出前 橋本忠夫 譯 ★★
 希臘の春 奥津彦重 譯 ★★
 ソアーナの異教徒 奥津彦重 譯 ★★
 水の 上 吉江高松 譯 ★★
 ピエルとジャン 前田 晁 譯 ★★
 生の誘惑(原名イウ) 前田 晁 譯 ★★
 モウバツサン短篇集 前田 晁 譯 ★★
 飾(他七篇) 前田 晁 譯 ★★
 お菊さん 野上豊一郎 譯 ★★
 水島の漁夫 吉江高松 譯 ★★
 若き日の手紙 外山樞夫 譯 ★★
 風車小屋だより 櫻田 佐 譯 ★★
 陽気なクルタラン 小川泰一 譯 ★★
 プチ・ショウズ 八木さわ子 譯 ★★

愛と死との戯れ 片山敏彦 譯 ★★
 獅子座の流星群 片山敏彦 譯 ★★
 法王廳の抜穴 石川 淳 譯 ★★
 田園交響樂 川口 篤 譯 ★★
 クオレ 愛の上巻 前田 晁 譯 ★★
 クレ 愛の下巻 前田 晁 譯 ★★
 恐ろしき媒 永田寛定 譯 ★★
 作り上げた利害 永田寛定 譯 ★★
 子守唄 永田寛定 譯 ★★
 希臘羅馬神話 野上豊一郎 譯 ★★
 フォーラス博士 松尾 相 譯 ★★
 パインズ詩集 中村爲治 譯 ★★
 あしなが チェン・エブス 譯 ★★
 おぢさん 遠藤壽子 譯 ★★
 自然論 片上 伸 譯 ★★
 エヴァンジェリン ロンクフェロー 譯 ★★
 クリスマス・カロール デイツケン 譯 ★★
 ニングサ ウル 齋藤 勇 譯 ★★

ラム沙翁物語 野上豊一郎 譯 ★★
 ブレイク抒情詩抄 譯 岳文章 譯 ★★
 イノック・アーデン 入江直祐 譯 ★★
 小公 子 若松睦子 譯 ★★
 聖女チヨウン 野上豊一郎 譯 ★★
 (チヤニス・ダルク) 野上豊一郎 譯 ★★
 人と超人 市川又彦 譯 ★★
 鰥夫の家 市川又彦 譯 ★★
 (思想の達し限る限り) 相良徳三 譯 ★★
 (同名メーセラ時代に歸れ) 相良徳三 譯 ★★
 ピーター・パン 本多顯彰 譯 ★★
 静寂の宿 本多顯彰 譯 ★★
 緋文 字 佐藤 清 譯 ★★
 ハーディ短篇集 森村豊 譯 ★★
 幻想を追ふ女(他六篇) 森村豊 譯 ★★
 ユリシイズ(一) 森田・名原他四名 譯 ★★
 ユリシイズ(二) 森田・名原他四名 譯 ★★
 ユリシイズ(三) 森田・名原他四名 譯 ★★
 ユリシイズ(四) 森田・名原他四名 譯 ★★

哲学・自然科学・文学・宗教・教育
 フラックラテスの辯明 久保 勉 譯 ★★
 トンク リ ト 阿部次郎 譯 ★★
 プラプロタゴラス 菊池豊一 譯 ★★
 トンク 純理性批判 上巻 天野貞祐 譯 ★★
 トンク 純理性批判 下巻 天野貞祐 譯 ★★
 (改訂版) 天野貞祐 譯 ★★
 カン 實踐理性批判 沢多野精一 譯 ★★
 カン 實踐理性批判 宮本和吉 譯 ★★
 カン プロレゴメナ 天野貞祐 譯 ★★
 スピノザ 哲學體系 小尾範治 譯 ★★
 スピノザ 知性改善論 山中尚志 譯 ★★
 哲學とは何か 河 東 洋 譯 ★★
 イマヌエル・カント 河 東 洋 譯 ★★
 歴史と自然科学・道 篠田英雄 譯 ★★
 徳の原理に就て 篠田英雄 譯 ★★
 認識の對象 山内徳立 譯 ★★
 七大哲人 安倍能成 譯 ★★
 人間機械論 杉 捷夫 譯 ★★
 ヒューム人性論 太田善男 譯 ★★
 科學の價值 田 邊 元 譯 ★★
 科學と方法 吉田洋一 譯 ★★

科學者と詩人 平林初之輔 譯 ★★
 將來の哲學の 植村晋六 譯 ★★
 根本命題 植村晋六 譯 ★★
 ヘーゲル哲學の批判 佐野文夫 譯 ★★
 史的に見たる 寺田寅彦 譯 ★★
 科學的宇宙觀の變遷 寺田寅彦 譯 ★★
 フアラデー 矢島祐利 譯 ★★
 蠟燭の科學 矢島祐利 譯 ★★
 アルプスの氷河第一 矢島祐利 譯 ★★
 アルプスの氷河第二 矢島祐利 譯 ★★
 アルプスの氷河第三 矢島祐利 譯 ★★
 自然認識の限界につ 坂田徳男 譯 ★★
 いて・宇宙の七つの謎 坂田徳男 譯 ★★
 自然に於ける美 ソロウイヨフ 譯 ★★
 藝術の一般的意義 高村理智夫 譯 ★★
 自然美と其驚異 板倉勝忠 譯 ★★
 ケーベル博士隨筆集 久保 勉 譯 ★★
 カントとゲエテ 谷川徹三 譯 ★★
 フアール 昆虫記 山田吉彦 譯 ★★
 既刊 定價各★★
 第二分冊・第九分冊・第十分冊
 第十二分冊・第十三分冊・第十四分冊
 第十七分冊・第十八分冊
 チャールズ・ダーウキン 小泉 丹 譯 ★★

種の起原上卷小泉丹著***
 人及び動物の表情について沼中澤太郎著***
 雜種植物の研究小泉丹著***
 生命の不思議上卷後藤格次著***
 生命の不思議下卷後藤格次著***
 回想のセザンヌ有鳥生馬著***
 この人を見よ安倍能成著***
 ミル自傳西本正美著***
 佛蘭西文學史序關根秀雄著***
 伊太利文藝復興期の文化上卷村松恒一著***
 ペーター論集田部重治著***
 ラフカディオ東西文學評論十一谷義三著***
 オ・ヘルン三宅三郎著***
 文學史の方法瀧沼茂樹著***
 人間の精神立花祐雄著***
 戀愛論上卷前川堅市著***
 戀愛論下卷前川堅市著***
 戀愛と結婚上卷原田實著***

戀愛と結婚下卷原田實著***
 基督者の自由石原謙著***
 イエス林達夫著***
 イミターシヨ内村達三著***
 聖アウグスティン内村達三著***
 アウグスティンの悔山谷省吾著***
 唯一者とその所有上卷草間平作著***
 唯一者とその所有下卷草間平作著***
 エミール第一篇平林初之輔著***
 エミール第二篇平林初之輔著***
 エミール第三篇平林初之輔著***
 エミール第四篇平林初之輔著***
 エミール第五篇平林初之輔著***
 懺悔錄上卷石川戲庵著***
 懺悔錄中卷石川戲庵著***
 懺悔錄下卷石川戲庵著***
 人間不平等起原論本田喜代治著***

人生論中村白葉著***
 獨逸國民に告ぐ大津康著***
 内村鑑三隨筆集内村鑑三著***
 文明論之概略福澤諭著***
 論畫四種坂崎坦編***
 論武内義雄著***
 孔子家語藤原正校著***
 報徳記富田高慶述著***
 二宮翁夜話福住正兄著***
 法律・社會・政治・經濟アリストアテナイ原隨園著***
 テレス人の國家モンテスキニ著***
 法の精神上卷宮澤俊義著***
 法の精神下卷宮澤俊義著***
 權利のための闘争日沖憲郎著***
 民約論平林初之輔著***
 暴力論上卷木下半治著***

暴力論下卷木下半治著***
 國富論上卷氣賀勤重著***
 勞働者綱領小泉信三著***
 哲學の貧困木下半治著***
 資本論初版鈔長谷部文雄著***
 猶太人問題を論ず久留明造著***
 自然辯證法上卷加古祐二著***
 自然辯證法下卷加古祐二著***
 住宅問題加古祐二著***
 原始基督教史考喜多野清一著***
 家族私有財産の起源西雅雄著***
 フォイエルバッハ論佐野文夫著***
 反デューリング論上卷長谷部文雄著***
 反デューリング論下卷長谷部文雄著***
 エングス空想より科學へ淺野吳著***
 マルクス・エングス傳長谷部文雄著***
 資本論解説大里傳平著***

ロイザルケ經濟學入門佐野文夫著***
 センブルクブルグの手續松井圭子著***
 マルクス・ドイッチェリヤザフ著***
 エングルス・イデオロギー三木清著***
 帝國主義長谷部文雄著***
 唯物論と經驗上卷佐野文夫著***
 唯物論と經驗中卷佐野文夫著***
 唯物論と經驗下卷佐野文夫著***
 何を爲すべきか平田良衛著***
 カール・マルクス伊藤弘著***
 戦争論上卷馬込健之助著***
 戦争論下卷馬込健之助著***
 ケネー經濟表増井幸雄著***
 經濟學及課税之原理小泉信三著***
 經濟的財價值長守善著***
 基礎理論長守善著***
 道徳的經濟的基礎草間平作著***
 藝術經濟論西本正美著***
 建築の七燈高橋松川著***

この後の者にも西本正美著***
 地代論山口正吾著***
 婦人論上卷草間平作著***
 婦人論下卷草間平作著***
 近代民主政治一卷松山武著***
 近代民主政治二卷松山武著***
 近代民主政治三卷松山武著***
 近代民主政治四卷松山武著***
 近代民主政治五卷松山武著***
 ギュイ社會學上より見た大西克禮著***
 ギュイ社會學上より見た小方正著***
 ギュイ社會學上より見た小方正著***
 ギュイ社會學上より見た小方正著***
 ギュイ社會學上より見た小方正著***
 ギュイ社會學上より見た小方正著***
 經濟要録佐藤信淵著***
 御註文に就て

□此の文庫は、普及を第一義として刊行
 する廉價版です。
 □内容の厳選 古今東西のあらゆる古典
 及び、價值高き良書を網羅し、校訂、

569
14

編譯に於ても最善を期します。
 □最低の廉價 出来る丈安く手に入れられる様に、小さい形の中に、澤山の内容を盛る形式を採りました。
 □購求の自由 しかも讀者が全く自由に欲しい本を隨時求められる自由選擇の方法を採りました。

□印刷の鮮明、校正の正確、製本の堅牢等の實際的方面に於ても亦最善を期します。
 □體裁は菊半截判、紙装、平福百穂畫伯装幀。

□活字は八ポイントを用ひました。
 □約百頁を單位として星一つでそれを現はし、★一つ毎に二十錢の定價です。

□★一つを、に算へて此の文庫の番號を進めてゆきます。
 □番號はただ發行順に従つて之を追ふものであります。

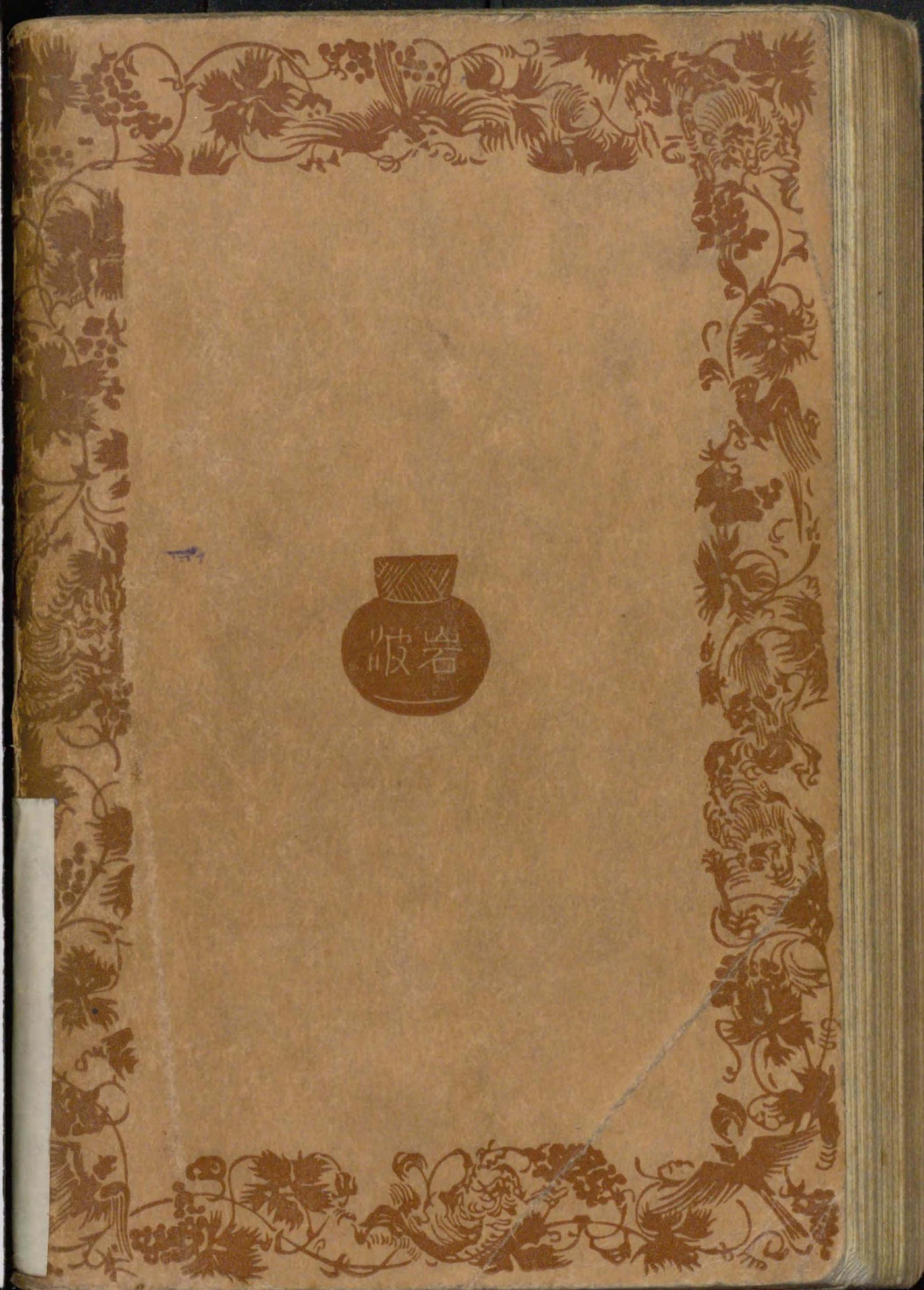
□★★或は★★★は、それぞれ二百頁或は三百頁の本一冊なることを示し、百頁づつの分冊ではありません。
 □定價(及び送料)は左表の通りです。

★★★ 定價二十錢 送料二錢
 ★★ 四十錢 四錢
 ★ 六十錢 四錢

★★★★ 八十錢 六錢
 ★★★★★ 一圓 六錢
 □御註文は前金で御願ひ致します。小さい本で極度の廉價なので必ず送料はお添へ下さい。切手代用は一割増に願ひます。

◇岩波文庫最新刊書目◇

アナトール・フランズ短篇集	大井 征 譯	★
聖母と輕業師 (他四篇)	森村 豊 譯	★★
エドガー・アラン・ポウ作 猫 (他六篇)	澤田 卓爾 譯	★★
黒	ハドソン 著	★★
ラ・プラタの博物學者	岩田 良吉 譯	★★
女の一生	モーパッサン 作 杉 捷 夫 譯	★★
鹽 鐵 論	曾我部 靜雄 譯註	★★★
中 世 歌 論 集	久松 潜 一 編	★★★
惡 靈 第一編	ドストエーフスキイ 作 米川 正夫 譯	★★★
惡 靈 第二編 (上)	ドストエーフスキイ 作 米川 正夫 譯	★★★

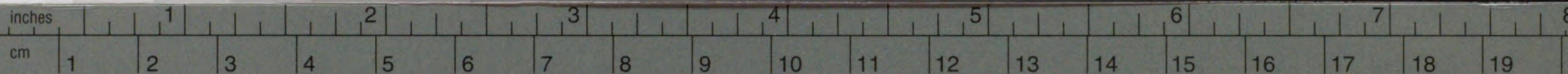


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

